断片　二〇一二

u_

（前に進むだけの…）

　前に進むだけの道は必ず途切れていた。円になって閉じている道なら途切れない。そんな道も探せば、うっかりもう踏み込んでいたり。しかしそれは道か。円は円に過ぎない。慎重に円を逸れないよう歩き続けても、道と見立てられただけの曲芸の一場と違わない。或いは、その上を歩けてしまえば、円だろうと角だろうと、ひょっとして点であってさえ道かも知れない。点の道なら、消えるか見失われるかしない限り、途切れもしない。円の道のように、口が開く心配もなく、体の傾き、重心やら遠心力だの物理の問題も気に掛からない。歩き飽きたら、それを懐に仕舞い、気晴らしに別の道を歩いて気晴らしにも飽きたら、また懐から点の道を取り出し続きを歩く。勿論、そんな道を歩く者に向かって「君はただありもしない点を、好きに頭に浮かべているだけで、一歩も道を歩いていない」と忠告も出来る。しかし態態そんな忠告をして来るからには、案外隠れた同伴者かも知れず、少なくとも点の道を歩こうと一度は試みた位の事はありそう。暫しの旅の道連れには恰好で、「で、この道行きに何処ま

で付き合ってくれるのかな」などと語り掛けても面白い。すると「道など何処にもないのだから、道を行く事もない」と来るだろうから、「全くその通り」と返す。実際、道など何処にもない。増して、その形などある筈もない。あるのはただ円や線や点が、ただそれだけであるのであって、それに沿って行こうとして、それが道になるだけで、その道が途切れるのは、そこまでは行こうと決めていたが、その先どうなるか足任せにしていた、その結果であり、まだまだ道は続くだろうとぼんやりした願望だけを抱くままに取り残されてしまっているのを、「道が途切れた」と苦し紛れに言い換えているに過ぎない。成る程それなら彼の前に道がないのも尤もな話し。彼はもう、何処何処までは行こうなどと目論める所には居なくて、ものの形にしても、線も点も円も、どれも一つの坩堝の中に溶けているようで、「さてそういう事なら」と先の道連れがまた話し掛けて来る。「多分あなた自身が、そこを通る道なのだ。尤も道なき道だが。一つその道を行くとしよう」「今更そうしようも何も、ずっとそうして来ただろうに」と、道なき道と言われた者が答えると、そうは答えてはみても、やはりその道である自らの姿は見えて来ないな、と思い知るだけで、その道連れにしても、彼に調子を合わせるだけの、道と何も係わっていない奴かとも疑われ、その道なき道の話しも怪しくなって、改めて彼は、どの形もが一つに溶けている中を覗き込もうとするしかない。しかしそこに良い案配に坩堝のよう

なものが差し出される筈もなく、彼はただ、何処か分からない所を、覗き込んでいるかどうかも分からないままに、のめって行く。いや、のめったのでもなんい。ただ、ずっとそちらを向いたままで居たのを、確かめられたらしい程の事。しかし道を行くのとは、当たり前だが、それは少しも似ていない。では何故考えるのがただ道ばかりなのか、と考えてみると、彼はその今向いている方の何処かにずっと居て、そこでは途切れても途切れても道を探しては歩き続け、それが段々と、道を探しては歩き続けているのとは違う事になっているようで、遂にそれが出来なくなって、そこを追われたかして、道を行くのと違う行き方で、ここまで来たらしいと、ぼんやりとでも見通せた。それならもう彼は、道など忘れて構わないではないか。それとも、道を行くのと違う行き方でここへ来たのを忘れないために、道についても忘れてならないか。しかし道なしに何処へも行けず、ずっと忘れずにいられる事など有る筈もないのであれば、（二〇一二年一月二日）

（知らない事ばかり…）

知らない事ばかり多過ぎて、知らない事がなくなってしまった、何一つ。い

やはり一つだけ何かが残っている。そんな気がするだけでなく、全く確かに、それはしっかりと手の内にある。ただ、それだけが残って他に何もないなら、それを他の知らない事で言い換えようもないので、説明の仕様もない。そんなものなら放って置くしかない。で、放って置けたかどうかは分からない。恐らくは放って置けてはいない。放って置くにも、それが何かを説明するのと同じで、それとは他の知らない何かが要るようなので。「綺麗は汚い、汚いは綺麗」と知らない声が、その一つ残ったものの辺りに響いた。いや勿論それは全くそうではなく、その知らない声とは別の事態が起こっているのは明らかだ。一つしか知らない事が残っていないなら、そうであるしかない。そうなのだが、その声を打ち消そうにも、それを打ち消せるものは何もなく、谺するその声を、ただそのままにして置くしかない。暫くして、それは消えた。消えて当たり前だ。しかしそれがそこにそのように響いてしまった事は、消えずに残る。それも当たり前なのか、或いは恐ろしく突飛な事なのか、それがまるで分からない。或いは、その分からないと言う事が、ひょっとして、一つだけ残った何かであっても、別におかしくはない。いや、そう考えるしかないのではないか。或いは別にそう考えなくても良いのか。或いはもう、そう考えるまでもないか。と、これはもう、知らない事が一つだけではなくなってしまっているではないか。そうして一つだけでなくなってさえいるなら、もうどんな事でも幾ら

でも、際限なくそこに知らない事としてあり得て構わない。そしてもしそのどれかを試みに取り上げ、それを具に調べれば、それは全く、何処をどうばらしても、際限なく知らない事ばかりで出来上がっているのを、見て取れるだろう。と、ここで文頭に戻って、この話しはそれで切りに出来るようでもある。そうして放っても置けるようでもある。しかし果たして、それで済むか。初めに戻って切りになるだけなら、何のために話し始めたか。初めからただ行って戻るだけと分かっていたにしても、僅かでもそこに何かが当てにされただろうに。或いは何かもっと思い付かないような事情が、この話しを始めさせたのか。やはり僅かでも、そのように問われるかも知れないようなら、ただ切りにしては済まないに違いない。その僅かさが肝腎だったりする。しかしどうやら、余りに時がない。たとえまた、その同じ話しをなぞるだけにしても。そこでまた、切りには出来ない話しを巡らせて行くための時が。その時の用いられるのは決して、堂々巡りや無限反復のためではない。同じ事の繰り返しと決め付けてしまいたくなるのも、偏に時が足らないからだ。時さえ十分に補われるようであれば、その時の齎すものは、かなり違って受け取られるだろう。ただ勿論それは勝手な見通しであって、実際そのような時に恵まれて確かめられたものではない。しかし空っぽな話しでもない。もう時はすっかり尽きて、その補われる気配もなくて、空っぽな話しなど、どうしてされようか。ただ失せた時と、そ

の時を費やせば係われたかも知れない僅かな何かを惜しむままに、その時の失せた果てに留まって、静かに次の事を待つばかり。いやもう時は消え果て、どうして何かを待てるのか。時がないなら、その時がないと言えてしまう時があるのは、どうした事か。時がないとだけは、時の外からでも言えるのか。待てない時を待っている。時はないのに時がある。時はあるのに時がない。これがその、知らない事が多過ぎて知らない事が何一つなくなってしまって、一つだけ残る知らない事なのか。そうであるなら、知らない声の「綺麗は汚い、汚いは綺麗」も、或いはもっと別の知らない事も、時のあるなしの知りようのない一つの中に、時と同じに解けて消えて行くようだ。いや、時があろうとなかろうと、それで時をどうこう出来る訳でもないなら、その時のあるなしなど知れた事で、一体その何が知りようがないのか。それとも、その何が知りようがないのか、が、知りようがないのか。そうかも知れない。しかしそれよりもただ、それが、とは尽きた時が、一つ残ってしまった事が、それをどうにも知りようがなくさせているのではないか。それはつまり、知らない事が二つあれば、その内の一つがもう一つの秘密であって、その対照からその在処を見出し、それを除けば一つは知れた事となるが、一つ残る知れない事から、どうしてその秘密を暴き出せるだろうか。いや抑も一つは一つであって、そこにはもう何の秘密もなく、（二〇二二年二月四日）

（小さい…）

　小さい。そこだけ何もなしに空けてはあるが、何を入れられるだろう。そして、何かそこより大きなものしか、そこに容れるべきものはなさそうだった。或いは、それより小さなものもそこに入るなら容れて構わないかも知れないが、綺麗に空いたままであるからには、それなりの、それより小さなものとの経緯があるのだろう。孰れにしろその前を、或いは上や下や脇を、様々なものが、大き過ぎてそこに入れず、瓦礫のように流れ過ぎて行くばかり。そのままもうかなりの時が経っていて、それらを全て集めれば、とんでもない量に膨れ上がる筈。実際それらは世界を押し広げている。世界の縁が延び拡がらないでは、行き場を失った瓦礫の流れは、この世界の外へまで溢れ出す。そうしてその、もし測れたとしても直ぐまた更に脹れて行くような大きな世界と比べるしかなければ、そこが、小さいと決め付けられるのも仕方ない。必ずしも小さかった訳でもないのに、増え続ける瓦礫とそれを受け入れ続ける世界のせいで、愈愈何も入らない、他の何とも比べようもない程に小さな隙間にされて、取り残されて行く。しかしもっと小さなものなど、探せば幾らでも見付かるではないか。

それらは何処へ行ってしまったか。その色形が浮かばなくても、その色形の調べようもない程に小さなものなら、至る所に転がったり降り積もったりしているだろう。どんなに隙間へも入り込んで、しつこくこびり付いたりもしているだろう。それらと比べてさえ、そこは小さな隙間なのか。いや、どうやらそうではない。通り過ぎて行くのが目に見える瓦礫と、目で見比べられる程の小ささであるのに変わりはないので。それなら、そこに何も入っていないのは、そこが小さいからではない。いや小さいからでもあるか。ただ予め小さくなければならなかった訳ではなく、そこは先ず何より、必ず空けたままでなければならず、何かそこにものが入って来てしまいそうになった時にだけ、それとの大小が比べられ、その度に少しずつ小さくなって来ただけ。そうして、より小さなものがそれに入ろうと挑んで来ては同じ事の繰り返し。となれば当然、そこに入り込みそうになったものはどれも瓦礫となって、そこを通り過ぎるしかなくなる。或いはそうではなく、或いはそうでもあるかも知れずに、目に見えないような小さなものは成る程何処かに好き勝手に湧き返ってはいるだろうが、その小さな隙間までは、それより小さなものは決して辿り着けないようではないか。その隙間より大きなものしか、その側を通り過ぎられないと分かっているかのように。ではそれらは何のためにそこを通り過ぎるのか。はっきりはしない。しかしどれも、その小さな隙間に最も近付いた時、その小さな隙間に放り

込むように、擦れたような短い音を残す。その音のためかも知れない。或いは、その音を使って、その音とは違うもっと澄んだ音が、辺りを鳴っているのを、その小さな隙間に聞き取らせるためか。或いはどの音とは限らず兎に角音が、その小さな隙間を小刻みに叩き続ける事で、その隙間は自らを見失わずにいられて、その音を絶やさないためか。その音との係わりを確かなものとするために、そこは空けてあるのかも知れないし、或いは逆に、そこが空いたままなので、そこに触れる音がどうしても要るのかも知れない。その音だけは、その小さい中へ入って行ける。いやしかし、そんな音を聞けるだろうか。音だけではない。大きかろうが小さかろうが、入ろうとしたものは見えただろうか、触れられただろうか。瓦礫が流れるのを、その瓦礫が世界を拡げるのを、確かめられただろうか。確かなのは、そこには隙間だけがあって、そこへ入るものは一つもなく、そこはずっと空きっぱなしだと言う事の他にない。その周りは全て、確かでない方へ流れ去った。何故かは分からない。何故、何故かは分からないかは、分かる。その隙間の他に何も残っておらず、他のもののせいにしようがないから。そこには何も入らなかった。それによって、それはそれだけでそこに残された。新たに何かがそこに降って湧いて来るような兆しもまるでなければ、そこにそのままであるしかなく、何と比べようもない。そのようなものであれば、それは何処となくどのようにか、小さいのだろう。それを小さいと言

っておけば、その何かを、その何かの通りに呼べた事にして済ませられる、そう彼は考えたに違いない。彼とは誰か。その隙間がそこに見出されるまでは、その隙間が彼であった彼であり、その隙間しかないなら、もう居なくなってしまった彼。或いは、彼でなくなった隙間は、彼が居なくなったので隙間であるしかなくなったのかも知れない。周りに何もなければ、それはもう隙間でもないだろうが、それでも確かにそれを、小さい何かと呼びたくはなって、そう呼ばせるために彼を探したくもなるが、彼を連れ戻せる筈もないなら、小さいそれは、その小ささを何処にも、（二〇一二年一月五日）

（見上げる空は…）

　見上げる空は一つだと思っていたが、そうではなかった。見る都度、その見る方見る方に幾つも散らばってある。と言っても空はただ空で何時もただ一つでしかなく、とするなら、散らばる空を一つに纏める力が、後ろに働いているに違いない。空を見上げるようでいて実はその力を見上げていて、その見上げる向きや力の向きが、見る都度違うものだったか。いやそうであればやはり、その見上げられた空はその都度違っていて、それぞれに散らばっていたのだ。

しかしもう、誰も空を見上げていない。ただ、如何にも中に何かが満ちているかに丸く膨れたようなものがあり、その何処かに覗き口があるので探して見ろと言わんばかりに、ゆっくりと向きを変え続け、目が放せない。しかし何から目が放せないのか。そこに何か色形のあるものが見て取れる訳ではなく、丸く膨れたようと言うのも、そこに何かが満ちているようなら、そんな形を取り敢えず描けるようでもあっただけ。それは、見て来た数知れない空を知らぬ間にそちらへ全て送り返したその結果だろうが、別にその中に空が一杯詰まっているのではなく、それらを送り返していた力の向きの束が、そこで受け止められているようで。そして最後の空が、そちらへと送られたらしい。満たされているような辺りが急に萎んで、慌ててその覗き口を探すと、それは直ぐに見付かって、と言うよりもうその薄っぺらな口の浮かぶ他に何もなく、そこからどうやら目には見えないだけのものが、惜しげもなく噴射されているようだった。そうと分かっているのに、何故目に見えないのか、目に見えないからそうと分かるのだろうが、歯痒い限り。しかし思い返せば、目に見えるものを見ようとした初めから、目に見えるものが目に見えた覚えはない。それは直ぐに当たり前のように思い出せた。ただ彼は、それを気にしないで歩いて来た。地面を踏む感触だけはあったので。いや、それは履き物の感触で本当の地面が確かめられたのではない。そして思い掛けない噴射の勢いで、その履き物は脱げ、目に

見えないものの上をころころ転がって、更に何処かへ滑って飛ばされて行く。きっとこれは空を舞っているのだ、とも考えられるが体は錘のように酷く重く、重過ぎて重さなどもうない。周りは目に見えないものばかりで、重さがなくても別に苦はない。そうと分かると全てが見えた。全てが一斉に明らかになって、目の中に映り込む。確かに起こっているのはその通りだが、では何を見て取れるか。初めて空を見上げた時の、その目を思い出せるなら、そこに答えがありそうだが、目を思い出すとは何をどうする事か。少なくともそのために目より優位に立つべきだが、思い出せない目と、何を競える筈もない。などと考える間もなく、目に映り込んだものらが、そこにあり得る全てになって渦巻いた。いや寧ろ、巻かれた渦がその向きを反転させ、渦と真逆の姿に爆ぜ散った。いやそのどちらでもない。そう見えてしまうのはもう、またも目が見えていない証しで。しかしその証しを掴めたのなら、それを掴んだまま、どれかの空と空の隙間へと、背を向けて身を投げるようにしてはどうか。そうも出来るなら、また別の空がそこにはある。彼の見上げた最後の空の、その次の空かも知れない。が、であれば、彼にはそれは空ではない。誰の空か決まっていない空が、一つでなく数え切れず散らばって、それらをまた一つに束ねる力が何処からか透けて来るなら、それらはもう端から散らばって、互いに互いから逃げて行く。それを彼に知れる筈はない。しかしそれは、それがそれであるのであれば、そ

れを隅の隅まで知るだろう。そのそれは、何も見えていない証しを掴んで空と空の隙間を探す彼を、何処へなりと見逃すに違いない。係わりは絶たれ、絶たれた係わりに係わり続ける彼に係われるのは、彼には見えない、見えないとも彼には分からない、空を見上げる彼でない彼だろうか。いやその彼と決して係われない彼であれば、空は一つにも見上げられて、（二〇一二年一月七日）

（血も肉も…）

　血も肉も骨も筋も邪魔くさい。動かなくても良いのに動くし、動かしたいようには動かない。全て金属と取り替えたい。「已めとけ」と金属の塊が金属人間になって語り掛けて来る。「血や肉や骨や筋より金属はもっと邪魔くさいぞ。知らないのか」「それはお前が碌に金属の使い方を知らないからだ」「金属の使い方だって？　金属に使い方なんてあったのか。そうか知らなかった。言われてみれば成る程、金属の体は使ってみれば、血や肉や骨や筋より何百倍も使い易い。まるで空気みたいだ。お前に言われて今やっと分かった。全く何て始末だ」「だから俺もお前のようになるんだ。今度はお前が俺に金属になる遣り方を教える番だ」「已めとけ。空気のような金属より血や肉や骨や筋は何百倍も

使い易いぞ」「何を言ってるか分からん」「分からんのはお前の経験不足だ」「何の？」「だから金属の」「だから金属と取り替えるんだ」「已めとけ。俺はお前に話し掛けられるまでずっと、途轍もなく扱い難い金属の全身と四六時中一睡もせず格闘して来たんだ。お前に話し掛けられるまで何年掛かったと思う。数えただけで三千年、そっから先は邪魔くさいんで数えるのは已めた。その間、幾らこっちから話し掛けても誰も、お前のように俺の話しを聞こうともしないんだ」「三千年なんて過ぎてしまえば、あっと言う間さ」「確かにな。だけど、考えて見ろ。俺はもう人間に聞こえる声で話しが出来る。金属の塊じゃなくて金属人間だ。俺の舌はツルツルで幾らでも滑る。金属だからな、空気のような。俺は、俺の経験を世界中に喋り捲るぞ。そしたら俺の真似をする奴が後を絶たんだろう。と言ってもそいつらが皆お前と同じで、金属の塊と話しが出来る奴らで、その数は限られているとしたらどうだ。何しろ俺は三千年を越えてやっとお前を捉まえられたんだからな。金属になったお前が、今のお前のような血肉を持った奴に話し掛けられる機会はぐっと減るだろうよ。金属の塊で居なければならないのが、三千年の三千倍を越えるのなら、中中あっと言う間では済まないぞ」「それは今お前が自在に体を動かせるようになって、それでそう感じるだけだ。動けない金属のままだったら、時の長さなどあってないようなものさ」「まあしかし、自在に動かせる金属の体ほど邪魔くさいものはないな」「そ

れで俺に何か気の利いた事でも言った積もりか」「空気のようでも金属なんだ。金属なのに、空気のようだし。こんな邪魔くさい事はないじゃないか。いやそんな事じゃない。時が纏わり付いて来るのが邪魔くさいんだ、空気のように」「それがどうした」（二〇二二年一月八日）

（後ろ向きに歩く…）

　後ろ向きに歩くのは別に、事の順逆について頭を働かせたいからではない。事と言っても大した事ではない。事があったとしか思い出せないような事なので。いや思い出せないからと言って、大した事でないとも言えない。試しに思い出せる事を並べてみれば分かる。並べた中に大した事は入っていないし、並べた端から消えて行く。消えたものは戻らず、並べられたものなど一つもなかったのではと疑う始末。しかし勿論、事があった事が消える事はない。後ろ向きに歩けるのも、偏にそのお蔭なのだが、それはまた、後ろ向きに歩く以外の事を何処かへ退けてしまってもいる。ただそれが、後ろ向きに歩く以外の事をする妨げになってはいない。妨げになる事など、もうすっかり消え果てて何て戻らない。後ろ向きに歩くのは、それが生死に係わると分かってはいても何

となく気が入らないが、そうしてしまのは、その他のしようと思えば出来る事がどれもこれも、更に途轍もなく気が入らないからだ。勿論その途轍もない方に、後ろ向きに歩くのを已める事も入っている。いやそれなら、気の入る入らないでそれをしたり已めたりするのも、その途轍もない方に入る。であるなら、後ろ向きに歩くのを已めるのを已めるのも、その途轍もない方に入り、そういう事なら、何であれその気の入りようなど取るに足らない訳で、後ろ向きに歩くのは、後ろ向きに歩くから歩くのだ、で良い。それを続けるか已めるか、またそのどちらにするかの決め手を探すか探さないか、などと言う事までが、後ろ向きに歩くのと何の係わりもない。それで果たして後ろ向きに歩けているのか。いやいや、後ろ向きに歩かなければならないのでもないし、後ろ向きに歩くとは何かを問うまでもない。恐らく誰かが何かを指差して、後ろ向きに歩くと言ったのだろう。その残した言葉と、その指差された何かが残っているだけで。勿論全くそうでなくても構わないが、そうであっても構わないなら、ただ後ろ向きに歩けるに任せて何の障りがあるか。それでも気が入らない。一歩先には動かし難い死が立ち塞がって、仮にその死に気付かずに歩を前に進めたとしても、行き止まりの壁に当たって額に瘤を作って、端で見ていた奴らにクスクス笑われて終わる位の事ではないか。寧ろ危うさは、気乗りしないまま引き返そうと後ろ向きに歩く不慣れな姿勢に潜むようで。と言って、その危うさ欲

しさに後ろ向きに歩くのでもなかろうに。かの誰かが指差したのは何か。歩くと言うからには、取り敢えずそれは、その目的やそれをする心持ちは知れなくても、何かの動きではある筈で、それで十分かも知れない。事があった事以外の事は消えて戻らず、そうであれば、どのような動きも、何事かへの働き掛けにはなり得ないのであれば。そしてその動きは、消える事のない、ただ事があった事の上に、真っ直ぐ綺麗にさらりと乗って、それだけで動じない。そのように見直せば何と掛け替えのないものか。或いはその綺麗で真っ直ぐな見掛けに騙されているか。そうかも知れないが、それも何事かへの働き掛けになり得ないなら構わない。構わないどころか、騙されると言う事が、そこに消えずにあるなら、そこに事があった事以外の事が起こったのは明らかで、大いに悦ばしい。それは、他の何事も並べた端から消えてしまう禍禍しさを際立たせもするが、それで変わるものは何もない。勿論その悦ばしさも何も変える筈もないが、その変えないと言う事が、そこにまた起こるのであれば、それもまた悦ばしいに違いない。いや何が悦ばしいのか。そうしてただ騙される事が繰り返されて行くだけ。それは、事があった事以外の事の消えて行くのを焼き直したに過ぎず、そこに薫り立つかの悦ばしさにしても、その消えて行く繰り返しへと消えて行くしかない。と言うより、それはもう端から消えていた代物で、騙されるのもそうであり、新しい事が起こったのではなく、事と言う事はどれも、

そのようである事から逃れられないのは、端から知れていた事で、（二〇一二年一月九日）

（呆気なくも日は…）

呆気なくも日は明けなかった。過ぎた日も失われるだろう。大抵の事柄は、昨日を顧み明日を備える中に起こるが、それらはどれも、もうどうにもならない。かと言うとそうでもなく、日々の中に埋もれていた有用な事柄が、あれやこれやと湧いて出る。それらをそっくり書き取るには、とても手が追い付かず、要点を書き抜いて行くのがやっと。いやそれさえ覚束ない。一瞬手を止めて何度か目を遣ったが、要点が並ぶどころか、読み取りようのない半端な言葉が、水の速い流れのように連なるだけ。その速い流れの見て取れたのも束の間、書かれた端から羽でも生えたように途切れなくそれらは消え去って、寧ろその透き通った羽の方が、見て取ろうと努めれば余程目に浮かぶ。或いは書き取ろうとするのが間違いで、有用な事柄が自ずと湧き出るなら、そうなるに任せて全ては上手く運ぶのでは。つまりその有用なのは、当の有用な事柄にとって有用で、それを用いて利を得られるものではなく、その湧いて出るまま止め処ない

なら、既にその利は十分に齎されている。が、そうであるなら、それを書き取ろうとした彼独りが全く無用で、そうであるなら、無尽に湧き出る有用な事も、彼にとっては全く無用に違いない。或いは、その有用さが彼に伝わらないだけで、無用な彼が独りそこに居られるのが彼独りの力でないなら、その湧き出る事が、彼に全く有用に働いているのは明らかではないか。そうかも知れない。ただそれでも恐らくは彼の無用も動かない。勿論無用であるのも独りであるのもまるで、態態取り上げるに値しない。無用でなかった事も独りでなかった事もなかったので。それで、彼が彼であるのに何か支障を来した、と言う覚えも彼にはない。そのような彼こそ、どうするにも値しないのだろうが、そうかと言って、都合良く消せたり捨てられたりも出来ない。いや、彼の無用が動かないと言うのは怪しい。動かないものなど有るだろうか。彼の無用は動く。しかし昨日も明日もなく何処へ動くか知れず、彼は、自らの無用が行き場もなく動くのを見た。勿論それは有用な方へ。そしてまた無用な方へ揺れると、（二〇一二年一月十一日）

（忘れてならない科白の…）

　忘れてならない科白の書かれた紙を、それは水に映る光の色の加減で嫌になる。程真っ白だったが、なくさないように、しなやかな若い小枝に二つ折りに挿す。翼を拡げるようだ。それはそういう場合の何故か何時もの決められた遣り方で、強い風の日でもそうだが、風に撓むその枝の先に、その紙が見当たらない。体はずっと前からそうだったように二つになって、一つは枝の下に留まり、一つは風に押され押され歩き、その距たりは拡がるばかり。そのどちらの体も多分何かの間違いで、間違いでない体は何処かと探すまでもなく、その探し始めた処にあって、ただそれは死んではいないが酷く膨れ、あちこちに裂け目が出来、直に、ばらけて行きそうだった。いや、ばらけるまでもなく、もうどう見てもそれは体の姿を失い、どくどくと血を通わせるだけの肉の塊で、すると二つに分かれた方の体は、間違いも何も、もう影も形もない。肉の塊も萎み血も固まってしまった。体は何処なのか。なくした紙が体だった。とそう考えるしかないなら、そうであるしかない。風に吹かれる枝の先に挿して目を離した迂闊さを悔いるべきか。逆にそうしたからこそ、体だけは風の向こうへ逃がせたと胸を撫で下ろすべきか。勿論、撫で下ろせる胸が見付かるなら是非そうすべきだ、と言葉を弄むのも虚しい、と決め付けられるかどうかは、撫で下ろせる胸とは何かをよくよく思い計ってからでなければならない。尤もそれに費やせる時のある筈もないなら、虚しいの一言で済ます手もある。しかしそれなら、

紙を体だと言うのも、似たような虚しさへ吸い取られてしまいそうで。勿論、どの道、体とはそうしたものだと見極められたなら、それはそれなのであって、どうと言う事もない。しかし体の事だったか。違う。忘れてならない科白、それが風に飛ばされ行方知れず、なのだ。しかしそうなって、何を失ったろう。科白が返らないなら、先ずはその失われた何かの方を探るべきだが、そちらは科白の行方以上に掴み所もなく、ひょっとして何も失っていないようでさえある。少なくとも、何を失おうと捉えようはないし、それで困らない。科白など忘れたままで構わない。風が取って返し、紙が手元に戻って、一体誰にその科白を言えるのか。勿論、その行方知れずのせいで、そんな事になってしまったとも考えられるが、そうだとして行方が知れても、もうどうにもそれを扱いようがないではないか。或いは全くそう言う事ではなく、忘れてならない科白は、何がどうであろうと忘れてはならないのであって、行方知れずなら、その訳を問う前に、何としても行方を探らねばならないのではないか。しかしそのためには、忘れてならない科白とは何かについて、幾らかでも分かっていなければならないが、その「忘れてならない」が分からない。全ては孰れは忘れられるか、そうでないなら忘れようはない。忘れられたら諦めるしかないし、忘れようがないなら大抵は行方知れずにはならない。その真ん中か何処かに、「忘れてならない」事を差し込もうにも、弾き返されるだけだろう。で、そうだとし

て、何もしないでは済まない。その行方知れずの忘れてならない科白に対し、それをどうするか。放って置くならそれも良し、しかし放って置くかどうかも決めずに時を費やす事は出来ない。そんな時のある筈もないので。そしてもうその決める時さえなく、それが放って置かれたかどうかも定かでないまま、忘れてならない科白は、そのままに、或いはそのままでなく、どうにかなったか、或いはどうにもならなかったかして、時からの係わりを断たれるまでに違いない。そしてもしそこに、何故そうなってしまったか、と言う問いが時に背いて残るなら、忘れてならない科白と同じものが、或いはそれに代わり得る言葉が、そう問うた彼の口を衝くだろうか。白鳥の子供の死骸が水際に打ち上がっている。首は垂れて横を向いても、体は真っ直ぐに据わっていて、巧く手を施せば息を吹き返すのでは、と何度も何度も思い直して何も出来ず、彼は動けなかった。その動けない自らの体を、そのままに、そっと掌に乗せたように撫で摩って、その科白か何かの言葉を舌の上に転がし、（二〇一二年一月十五日）

（孤独…）

孤独。孤児（みなしご）と独り者の義。孤児で独り者であれば申し分ない。

孤児であるだけ独り者であるだけでは、やや心許ない。孤児と独り者が並んで寄り添えばどうか。言葉の形なら、ぴたりと孤独。私は孤児で彼は独り者。私は孤児だが独り者ではない。私には彼が居たから。しかし、彼には私が居ても、彼は独り者。どうしてだろう。彼が私のような孤児でなかったからか。そうは思えない。たとえ彼が孤児で独り者でも、そして側に居る私が孤児であろうとなかろうと、彼はずっと独り者。そうとしか分からない。その先は彼独りの事。そんな彼でも側に居てくれれば私は独り者ではない。それはきっと、彼に出会った時、もう私がそう決めていたから。彼に出会わなければ、彼でない誰かに出会って、私は独り者でなくなっていた。私がずっと独り者のままなんて、あり得ない。私は多分彼のように強くない。尤も彼にすれば、その私の弱さが私の強みに見えたかも知れない。その弱い私は、独り者であろうと望めもしないが、そう望めたとしても叶う事ではない。それは私が孤児だからか。孤児でなかった事がないし、私の周りは皆孤児だったので、何とも分からない。しかし彼に寄り添えて独り者でなくなった私は、何を得ただろう。彼だけ。その彼も、私を独り者でなくするだけの彼でしかない。勿論彼に対しては、それだけで満足すべきだろう。彼を独り者のままにして置くしかない私なのだから。いやそうではあっても、彼が私から得たものは一つや二つではなさそう。それどころか、私には、彼にないものが数知れずある。それは彼にも分かっている。と言

うより、彼に分かっているから私にも分かる事が出来た。私は何と沢山の、決して失う事のないものを持っているだろう、彼と居て初めてそう思えるに違いない。私は彼に分かる事を通して、彼を分かる。だから私は独りではない。その逆はない。彼が、私に分かる事を通して、私やその他の何かを分かる事はない。それが彼を独りにしているかどうかは、彼の事。それでも彼は、彼の仕方で私から多くを得た。私にそれが出来たのは私が孤児だからか。彼は私が孤児であるのは知っている。しかし孤児とは何かを、どれ程知っているだろう。彼が見て、得るのは、私が見せて与えるものでしかない。孤児の私が何を失ったかは、彼は何も知らない。その失ったものが、私を孤児にしているのに。もし彼にそれが知れたら彼は独りでなくなるか、は彼の事。私も別にそれを期待しない。そうなっても私の得るものはないから。それを知る彼、を得るには得るが、その彼を、どうにか出来るのでもない。どんな彼でも彼はただ彼であれば良いし、そうであるしかない。ただ、私は私、彼は彼、やはりこのままずっとは居られない。彼と離れて私は独り。でも彼なしの独りの私とは。もう何も彼に替われないし、独りの私では居られない。ただ孤児であり、そうであるしかなかったものとして、消えて行くしかないのだろう。残る彼はと言えば、もう私だけになっていて、私が居なくなれば、彼は独り者のままに、孤児にもなるだろうか。それとも、消えて行く私を忘れさえしなければ、彼は孤児にならず

に済むだろうか、まさか。寧ろ逆で、彼の忘れない私が、彼を否応なく孤児にしてしまう。そして私もまた、彼と離れ、私であり続ける望みを絶たれ、独りで消えて行く。こうして私も彼も、孤児で独り者。孤独。全く孤独だけが残るのだが、彼にも私にも、それは彼と私にしかあり得ない孤独であるなら、私と彼は同じものを得たのであり、そうであるなら、それを得られなかった私でも彼でもない。これは希望なのか。いやそれは遅れて来過ぎた。後ろを向かせるしかないものは絶望だろう。しかしそれとても、私と彼は同じものを得たのでら、その絶望に共に寄り添えた事によって、その出会いに恵まれなかった私でも彼でもない。いや、同じものを得たなど、身勝手な思い込みでしかないのでは。私に、彼の孤独と絶望の何を分かるのか。私の孤独と絶望が、どう彼に届くのか。私は私、彼は彼、離れてしまえば、共に分かり合えるものなど何も残らない。それぞれのただ孤独なだけの孤独が、何時かは、それ自らによってさえ忘れられ、消えて行くだけ。でもその、他に替え難い、他に求め得なかった孤独によって、（二〇二二年二月十八日）

（病は仮のもの…）

病は仮のもの、病むのは仮の事。死に至るにしろ、命が死に至るのであり、病が死に至るのではない。そう分かっているのは当の病であって、なので病は、自らが仮のものでないかのように常に周りを欺こうと努め、まんまと欺かれた誰かが、それを指して病と呼べば、或いは誰それは病むと言えば、それが病なのであり一度そうなっては、それを仮のものと言っても通じない。通じないなら仕方ない。仮の事に振り回されるその姿が哀れなだけ。仕方ないで済まないのは、欺かれなくても病から逃れられない事。仮のものと分かっていようと、何時それが命を奪いに来るか知れない。死は仮の事ではない。或いは仮の事かも知れないが、死んでしまえば、生きて死を仮の事と見て取れなくなるのは確か。行く末は、その仮の事に委ねられてしまっている。それは生きる事が既に仮の事だからだ、と言ってしまえば勿論それだけの話しだが、同じ仮にしても、病は、先ず仮に生きて死ぬ事があって、その仮事に後から仮に被さるのであれば、その含むものは幾らか異なるだろう。そのどう異なるかは難しいが、少なくとも死は、誰をも欺こうとはしないのではないか。死に欺かれたい、それが仮のものでないなら、それを仮のものであると欺かれたい、と藻掻くなら、それは無理もない。それを醜い徒労と言い捨てる積もりはない。死がそれを許さないだけの事。一方、余程病を好むのでなければ、病に欺かれたくはないが、病は、それに罹って生きる命を常に欺いて已まないようだ。病を、仮の事と見

破ったところで何程の事だろう。病はそのような仕方でも、どのようにでも欺いて来る。仮の事と定まって、それでもそれがそこに居座り続けるなら、それがどうして仮の事などであり得ようか、或いはそれでも仮の事でもあり続けるのであるようなら、仮でない事よりも扱いが厄介なのは明らかではないか。それを仮の事などと見破っている積もりなのも、欺かれている内に違いない。病を得れば、必ずそれに欺かれてそれを何度、仮の事と見破り続けようと、それで病の衰える筈もない。仮のものであるより先ず、病とは常に欺いて已まないものの事だろう。しかし、だから何なのか。そんな決まり切った事に拘っていても仕方ない。そうであるにしても、病を仮のものとして病まなければならない。肝要なのはそれだ。病が仮の事であるのを一時も忘れるべきでなく、そのようにしていなければならない事から決して目を離してはならない。そうしていなければ、欺かれていようといまいと、病に溺れ病に縛られ病に窒息させられるだろう。いや、それはそうなのだが、そう何時までも、そうしていられるとも限らない。仮の事の病から身を剥がされ兼ねないような、局面の転回が迫っているようでもある。静けさは必ず破られる。その予感なしに静けさに身を置けはしない。仮の事の病から目を離さずにいるのは、その時を静かに待ちたいからかも知れない。そのために眠気に抗うまでもなく、もう眠りは静けさの底へ捨てられて決して浮かんで来ないが、それは悪くない。もう考える用もな

いが、眠りもきっと仮の事だったろう。そうして病にしてもまた、同じ静けさの底に沈ませられたなら、その仮の事であるのを忘れるべきでない事からも、解き放たれるのかも知れない。或いはもうそうなっているか。忘れる事に抗うために、心も体も少しも動いているようではなさそうなので。病は、ただ仮のものとして、そのあるべき所にあるべきようにあるだけで、それもまた、その終わる時を待っているようではないか。しかしその終わるのは何か。仮のものが終われば仮でないものが現れるしかなく、仮のものはそれには立ち会えないだろう。或いは、その入れ替わりの一瞬までを、仮の事としてなら、垣間見られるだろうか。そうして仮の事共は、初めから何処にもなかったかのようになくなって、その仮のものであった事を確かに示し、その示した方を、（二〇一二年一月二十一日）

（見渡す限り穴…）

見渡す限り穴だけになった。掘り尽くしたからではない。掘れる筈の所が全て独りでに崩れたか流れたか蒸発したかして、穴を掘れそうな所は何処にも見当たらない。なので見渡す限りの、何を見渡しているか知れない。何も見渡し

ていないかも知れない。それでも見渡す限り穴だけになったと言うのは、穴を掘るしか考えられないからか。しかし例えば石ころを拾うしか考えられないとしたら、見渡す限りの石ころに見えたろうか。勿論本当の事は分からないが、どうもそうとは思えない。ただ、穴に見えているだけで穴とはまるで別のものだとしても、見渡す限りの穴にしか見えないように見えてしまう何かしかない所に来てしまったのは確かなようではないか。その、そう見えてしまうしかない穴は、だから、直ぐに行き止まりかも知れないし、無限の彼方まで続くのかも知れないし、同時にその両方であるのかも知れないし、その両方であるのがつるつるした表面に映っているだけかも知れないし、そのような事と全く係わりなしに穴であるかも知れない。知れないなら考えても仕方ないかも知れない。実際何も考えられていないのではないか。実際、考えなくて済む事しかないようだ。いや、確かに、何故こうしてこの穴とだけ係わっていなければならないか、なら、考えないで済む。しかし係わっているのが、穴にしか見えないように見えてしまう何かであるとは限らない。そこにそれしかなく、何もそれと比べたり並べたり出来ず、それが何であるかを、それでないものを通して見られないのであれば、それを、ただ考えないで済むで済ませられるかどうかなど、分かりようもない。ただそうであるにしろ、では何を考えられるか。こうなる前はどうであったかを思い出そう。或いは、こうなったのでなければ、先をど

う見越していたかを思い出そう。とは考えられる。するとその振り返る方には、全く穴でしかない穴しか見付からない。間違いなく穴。そこに何があったか一々言い立てるまでもなく、さっきまで、そこに彼の全生活が押し詰められていたのは、そうでしかない手応えによって確かだ。そして同時に、その一切の、失われた手応えも、そうでしかないものとして来た。しかし勿論彼は、もうそこには居ないし戻れもしない。何もそこへと落ちようのない穴。それで穴だろうか。寧ろ、どんな穴をも塞ぐ扉が、まるで扉に見えない程に、緊く閉じられているのではないか。その緊さがまるで発条のように働き、彼はまた、思い出そうと考えたより前、振り返る前に戻った。すると見渡す限り穴さえない。穴さえないとしか見えない何かがあるようでさえない。これで愈愈、考えないでは済まない、で済むようではないか。それで何処か明るさが見えたようでもあり、それに肖ろうと、その明るさだけを見ようとすると、その明るさの擦り抜けて行く先が、また見渡す限り穴だったが、見渡す限りそれは塞がってもいた。しかし、それが振り返る方ではなく先の方にあるからなのか、緊く閉じた扉が彼を何処かへ弾き出してくれるような事は起こらなかった。そうなるともう、塞がれた穴にしか見えないように見えてしまう何かしかない所に来てしまった、などと言う呑気な話しでは済まない。そう見えるだけであるにしろ穴であれば、そこに彼は居られるが、それが塞がれては彼は何処にも居られない。急いで居

場所を見付けなければならないが、手掛かりなどない。しかしそのようにしてそこに居るなら、そして、そのようにして居る他にどうにもならないなら、そこだけが彼の居場所だろう。但しそこが居場所になるのと引き替えに、見渡す限りの塞がれた穴を見失うしかない。居場所とそこに居るだけの彼が残る。居場所が彼の掛け替えのない伴侶。伴侶ならどんな姿だろう、それを見ようとせずにはいられない、のが大きな誤りで、そんな彼はもう、居場所とそこに居るだけではなくなってしまっている。霧の晴れるように、塞がれた穴が、ただそれだけで姿を見せる。が、それを見るのは何だろう。それだけが穴に塞がれるのを免れた、塞がれた穴の外を舞う一欠片の塵位ではないか。そんな事を思える彼なら、その見渡す限りに見渡すのは、（二〇一二年一月二十四日）

（その消えるように…）

　その消えるように煌めいた方へ目を遣るしかない。或いは、ずっとただそちらしか見ていなかったか、点のように小さな三角が火の色をしていて、火の色をしているなら火なのだ。船蔵の屋根に乗って背を丸め、日暮れ前の暗い静かな東の海をぼんやり眺め、その水平線の際に遠い船火事を見付けた、その時の

火が来ている。すると、その渦を巻く熱の音がキンキンと耳に鳴る。目に翳みが懸かると、炎よりずっと入り組んだ形の大きな金属の塊が幾つも犇き、踊り狂って互いを激しく擦り合うのが分かる。すっかり取り巻かれたようでも、近くには来ない。時々音が途切れる。そこを狙って目の翳みを振り払うと、輝いているとばかり見做していた金属が、どれも何処までも真っ暗を貫いて行く塊で、その暗さと暗さが擦れて、互いを激しく揺さぶり続けている。音も、渦巻く熱もなかった。暗さと暗さの擦れる様が耳を鳴らしたらしい。実際には、暗さに貫かれた、果ての見えない彼方と彼方が擦れているに違いない。そうと知れるのは、そうと知る彼が、その彼方と彼方の隙間で震えているから。或いはその震えが彼。その中を、直線にしか見えない曲線が貫く。その彼にとっての見える見えないは、彼には精確に知れて、彼の内も外も、一切は明白だった。しかし明白とは何かが、まるで明白でない。彼は、彼の体を象った鎧甲を身に着けていて、明白なのはその鎧甲だけで、それが何から身を守るか分からないし、それは彼そっくりで、彼自らも、その鎧甲と自らの姿の見分けが付かないが、そこで鎧甲など身に着けられる筈もない。彼を貫く直線にしか見えない曲線が、全てを撥ね退けてしまう。彼の知る明白さも。それを受け入れるしかないか抗えるか、そのような問いは、目の翳みの中に溶けて流れて行く。そこに独り残される彼は、彼方と彼方の何もない隙間に居て、突っ支い棒のように二

つの彼方を支えようとする。そこに彼はやっと、自らを貫く曲線のその曲がり具合を認め、それでも直線にしか見えないのは何故かと言う問いは翳みに溶け、その曲線さえ見失わず、それに寄り添ってさえいれば、二つの彼方は彼を見捨てないだろう。しかしその二つの彼方が、水平線の向こうとこちらに隔たっていて、もう二度と二つ並ぶ事はないに違いない。曲線とは水平線だった。それが答えだ。ただ、その答えの間違いであるのは明白で、そこでは、その明白とは何かも、何の証しも要らず明白で、彼はその間違いである水平線を斜めに過ぎ、燃え果てた遠い船を追って海の藻屑と消えたかったが、突っ支い棒の彼には許されそうにない。しかし隙間を失った突っ支い棒が何を支うか。海の藻屑と何が違うか。まるで違う。彼は海には居ないし、藻屑となれる身もない。ただ明白であるだけの彼が明白に居て、そうして彼は自らの明白を支うだろうか、棒であるために。明白は彼に支われる必要などないのも明白なのに。そうして棒であろうとする事など無用であれば、自らの明白に背を向け、謎と混沌か、そうとさえ言えない方へ身を投げられるのではないか。そんな事は出来ない。何故ならもう、そこへ身を投げ出されているから、と言う答えも間違い。そう間違ったまま、あの海に浮かんだ三角の火の色を取り戻せないか。そう自らに問い続けて来た。或いは一度もそう問うた覚えがなくても、変わらずそうだったに違いない。そしてそれが来ている。それだけが。火と火を浮かべて沈めた

水などは、ただの間違いかも知れなくても。つまり仮の姿の水に浮かぶ火によって長年彼を待たせたものが、そこに彼を呼び出していて、彼を、その火に見えたものの方へ送り出そうとしている。それだけは間違いなく明白、そんな言い方も受け付けられない程に。彼は急いで支度をするが、何をしたかも分からないまま、火の色は忘れて曲線を越え水の果てに達し、その行程を果実として懐に抱えて更にその先を見越すと、実はまだ支度を始めてもいないと気付くそこに、明白なものは何もないならそれは火で、（二〇一二年一月三一日）

（紙を切り始めると…）

紙を切り始めると直に眠くなり、二つ折りの折り目が揺れて二重にも三重にも見えて来るが、それから目を離さないでいれば、鋏は止まっても、そのまま眠りには落ちない。ただ、切り目と折り目の分かれ目が鋏の陰になっていては、眠りを幾らか押し返せても、鋏の向きが定まらない。そうして、うつらうつらしていると、折り目と切り目で分けられた紙の左と右の有り様が、白と黒程に、はっきり違ってしまっている。どちらかに世界の良いものが全て集められるなら、もう片方には世界の悪いものが全て集められているに違いない。すると直

ぐに良いと悪いの境目はぼやけて、白と黒やら良いと悪いやらよりずっと激しく対立する、もっと別の二つの何かが、左と右を占める。その対立が何かも分からない内に、その境目もまたぼやけ、対立は消えて散る。必ず更に激しい対立が何度も繰り返され、何度でもそれを繰り返せるならそこには安らぎがあるのだと思えると、それがもう最後で、その最後だけ、対立する二つを彼が決めなければならない。或いは、その気になれば、そんな役割は抛って、さっさと繰り返しの外へ出ても行けそうだが、一つ間違えば、弾みで己の首を鋏で切り取る事にもなり兼ねないなら、顔を背けたくなる誘惑を払って、左右の対立に向き合うしかない。決めなければならないのは彼だが、そこにもう決めるべき二つは用意されていて、その二つに決めるか決めないかだけに、彼の判断が求められている。しかし決めない方を選べるだろうか。そちらを採れば恐らくは、鋏は彼の方を向いて、彼の体が、対立する二つに切り分けられるしかなさそうなら、決めるしかない。そうしてその決めた二つはと見ると、片方は、殺してその肉を腐らせる事であり、もう片方は、生きたままその肉を喰らう事だった。決めてしまったとは言え、どちらも彼の手に余る。仕事を抛つ道は、もう彼自らが閉ざした。いや彼の役割は決めるまでであり、手を下す事ではない。仕事は終わった。なのに外へ出られないのは、一体何が殺されるのか、何の肉が生きたまま喰らわれるのか、それがまるで見えて来ないからだが、見回すと、見

回すまでもなくそこに居るのは彼だけ。決めた通りにされるのが自らの身であるなら、それはそれで構わないが、どうも一向にそうなりそうにない。繰り返し見回していると、少なくとも彼の姿はない。彼はもうそこに居ないのではないか。その居ない彼を探すのも彼なら、その彼は何処かには居る。しかしそんな彼を、殺したり、その肉を喰らったり出来るだろうか。いやそんな何処に居るか知れない彼なら、もう殺されるか、肉を喰われるかしていて、ただそれも見えないだけかも知れない。それで構わない。他に取り上げるべき事もなく、彼の考えは止まった。その止まった所に、彼は彼の姿を見るしかなく、止まった切り動かなくなった考えが、彼だった。殺されも喰われも出来る肉もしっかり見える。その肉を纏った動かなくなった考えは、二つに切り分けられ、彼が決めた二通りの処置が為された。それで終わりかと言うと、片方は殺され続け腐り続け、片方は生き続け喰られ続けて、とても終われそうにない。止まった考えの彼であれば、そこに安らぎも不安も寂しさも楽しさも湧いて来ないが、その彼は知らず知らず体を左右に大きく揺さぶっていたらしい。何故なら、或いはもっと別の遣り方だったかもしれないが、その大きな動きによって、彼は彼の決めた通りの二つから逃れ出ていたので。そうして彼は未だ二つに切り分けられていない間の、その後ろ端に居て、後ろである程、危うさが身に迫つてしまうのを感じ、それを逃れるには兎に角、考えを止めたままでは拙いとは考

えを働かせたが、後が続かない。後ろ端の後がないのだから、後が続かないのも尤もで、その後も跡形なく断ち切られれば、それが何かの解決になるのかも知れない、そう朧気にでも考えを働かせられたらと、（二〇一二年二月七日）

（走り続け…）

　走り続け、果てのない疲れが腰から下の感じを奪い、下半身はすっぱりと切り捨てられた上半身だけが氷の上を真っ直ぐ滑って行くような、しかしそれでも、素速く腕を振り、強く踏み出す足を決して止めず、脇目も振らずに走り続けてやっと、腹が減っているのだと分かる。濁った水の匂いを、その波立つままに嗅ぎ取れるのだから、間違いない。ただそう分かるために走ったし、走り続ける。そしてその空きっ腹を抱えてやっと、闇を抜けた先に、行き先が定まる。足よりも空きっ腹が先にそちらを向くので。そこは広い屋敷で、それぞれの部屋は、どれも建物の構造から斜めに浮き上がるように違った向きに傾き、何処も薄い透ける布で出来たような壁は、あちこちが剥がれて、ゆらゆらと揺れている。まだ走るのを已められないので、屋敷内が不案内な身には、行き止まりの壁をぶち抜かなくても、布を撥ねるだけで済む。部屋は三重四重に積み

上がり、その傾きを昇り降りしながら、部屋から部屋を飛び移って行けば、階段を使わなくても三階四階まで上がってまた下りられた。階段は見掛けない。或いは酷く傾いた部屋に見えてしまうのが階段かも知れないが、相変わらす氷の上を滑るように走るので、階段を踏む足の感触は得られない。そんな風に幾ら広く走り易くても、こんな出来損ないの屋敷は建てない方が良かった、などと言う者は一人も居ない。そんな事を言うかも知れない者は決してこの屋敷まで辿り着けないから。尤も、走っても走っても誰にも行き会わないなら、そう言わない者も辿り着けていないらしい。そんな事より空きっ腹だ。空きっ腹が彼をこの屋敷に招いたなら、それをどうにか出来るものが見付からなければならないが、ない。空きっ腹は疾っくにギリギリで、それより酷くならないのが、せめてもの慰め。或いはこの屋敷ならではの走りが、空きっ腹が限界を超えないように抑える働きをするか。新しい抜け道は全て試し、もう部屋から部屋への同じ抜け方を繰り返すだけになった。そうしている内に、部屋何室分かの一塊の、どうしても足を踏み入れられない所があるのに気付く。屋敷の形が、歪に窪んでいるのとは違う。壊れた跡もない。そこだけ部屋を造り忘れたようでもあるが、それに相当する空きを垣間見られた訳ではない。ただ、こちらとそちらの境目と思しき所が何十箇所もあって、それらを足を使って線で繋げると、そこに歪な閉じた立体が描かれる。いや閉じているとは言い切れない。線

で囲まれた面のどれかが、開かれて外へ通じていても確かめようはない。勿論そうである度合いは高くない。屋敷中を隈なく巡ったが、その立体を離れて迂回させられた覚えはなく、秘密の通路があるなら余程巧妙なのだ。取り敢えず、こちらとそちらの境目に順に楔を打って目印にして行く。するとその境目になる部屋の造りがぐらぐらと緩んで楔を離れ、足を踏み入れられない一塊は、段々と剥き出される。と言ってその裸の様は露わにならず、そこに目に入るのは黒い艶を増すかの楔ばかりで、その前で、ぐらつく部屋と部屋も離れ始め、このままでは屋敷ごと解体だろう。もう屋敷だったようでもない。捨てられた部屋が遥々持ち寄られ、山積みにされていたに違いない。全てに楔を打てたかどうか、もう部屋を飛び移るのも儘ならず、ただ楔に囲まれる、姿を隠すままの塊に身を託すにも身が定かでない。足が止まっているのだ。空きっ腹は何処へ行ったか。途切れ途切れに浮かぶ考えは毎回同じで、目の前の一塊と空きっ腹は、必ず何処かで繋がらなければならないが繋がらない、と言う事。部屋の山はすっかりばらけ、ちらほらと幾つかが遠く小さく浮かぶだけで、そのもっと先に、一塊と空きっ腹も、繋がらないままでも、濁った水の匂いの端に並んで浮かんでいて欲しい、そう思う彼の上半身は闇に沈み、下半身は天を向いて波打った。その蹴る足はない。それでも走りたいかと自らに問えば、走りたいに決まっているが、そう問うための口と頭は何処か。ただ、そんな己の姿を怪し

むには及ばない。何故なら彼は、濁った水を届けようと走ったのだ、空きっ腹の彼にその水を飲ませようと。こうなるのは疾っくに見えていたが、その見えていた所に身を置けているのなら、（二〇一二年二月九日）

（水となって溢れる…）

　水となって溢れる程に病の塊である筈なのに、それらしさが見付からない。もう見付ける用もないからだ。と決め付けても良いが、決め付けなくても良い。それでも病の溢れた濁った水は、直ぐに片付けられる。行く行くは、来たもの全てを片付けなければならない、その準備のように。或いは、濁った水を側に置いては、それを見る目も濁ってしまうのが嫌だから。そんな嫌さも、彼には用はない。濁った水が何処をどう溢れようと、彼の目は濁りようがない。彼が目を背けるより、濁りの方が先ず、彼に背を向けていた。ただ、その目が澄んでいるからではなく、寧ろ逆に、その目は何よりも濁っていて、それによって、周りが澄んで見える。それは病に関わりなく、ずっとそうなので、だからそれで、目について語れる事は尽きている。その目が見て濁った水なら、それもまたそれで言い尽くされている。何か別の、まだその目で見ていない新しい事を

言うべきだが、それが見付かっても、それはもう見えてしまった、新しくないものだろう。つまり、まだ言い尽くされていない事を、この目で見付けようとしたところで、徒労でしかない。見ようとする目は要らない。では目は、何の用をするのか。その用を探す用ならあるかも知れない。但し、見付けるのとは違った探し方で。そんな探し方のある筈はない。そう決め付けても良いが、決め付けなくても良い。多分どちらも同じだろうから。すると終わりが見えて来る。それは新しいとも古いとも見分けが付かない。何の終わりか分からない。分からないとも分かっていないかも知れないが、恐らく分からなさには二つあって、一つは余りにも多過ぎて重過ぎて遠過ぎて果ての知れないような分からなさであり、もう一つは、余りに少な過ぎて軽いとも近いとも少ないとさえ分からない分からなさ。いやそうとも分からない分からなさが、また別にあるに違いない。ないかも知れないが、あるに違いないとしてもなければ、見えて来た終わりも見失われるに違いない。ただ終わりなどもう、見失われて少しも構わない。初めから見失われて構わないものが終わりなのではないか。そのように終わりの見失われても、尚あるに違いないとしていなければならない分からなさ、いやそんな言い方の届きようのないものが、行く行くは、来たものを片付けなければならなくさせる。その事はしかし、決してそうとは分からない仕方でしか分からない。だから分からないままでもありそうで、そのそうとは分

からない仕方だけが、見える見えないを貫いて、事が運ばれるように事を運んで行くのではないか。などと分かったような言い方をしても、一つ目の余りに多過ぎる分からなさにだけ引き戻され、溢れた濁り水が止め処ないように、徒労の渦に、ただ見えるだけのものでない全ては、呆気なく沈められる。その沈められた後の静けさの中に、その沈められたものの全てが、直ぐさま甦って溢れ返るのを、濁りの塊である目で捉えたい。そう何となく願っただけで、それはもう叶ったようでもあり、叶う筈のないようでもある。いや静けさからが虚しい願いに過ぎなくて、そこに残る、ただ見えるだけのものが、果てのない騒々しさを競っているようでは、（二〇一二年二月十二日）

（誰かが絵を…）

誰かが絵を忘れて行ったらしい。真っ暗に見えるが、そこにだけ光りが当たっていないからで、向きを変えると、べったりと絵の具を乗せる図柄が浮かんで迫る。それを見る間もなく、その描かれた奥行きの中に飛び込まなければならないが、遣り損ねて、何が描かれているかを眺めなければならなくなった。影のような痩せた人物が、縦に長い隙間から、その明るい奥を覗こうとしてい

るが、そこに何かを見出しているかどうかは分からない。その表情は驚いているようでも、それは、ただそこにいきなり隙間が現れたからかも知れない。しかしそれは己の顔ではないか、と思うと彼は、その絵を隙間から覗き見ている自らの姿に気付いて、その姿から飛び退いた。自らの姿から、どう飛び退けるのか、何も分からないまま、彼は、絵の架かっている壁の脇の暗く白い階段を一気に駆け下りた。下の階の壁にもう一枚の絵があって、その絵には、絵の中に飛び込んで、絵の中の階段を駆け下りる影のように痩せた彼の姿が描かれているが、それを彼は眺めたのではなく、その絵の中の彼になって、そこにそれを現し出したに違いない。足を止める訳には行かず、絵の中は狭いので、また階段を駆け上って初めの絵の前に戻ろうとしたが、壁に絵はなく、奥の明るい隙間だけがある。そこを覗く彼の姿はなかった。彼自らがそこを覗けば、そこを覗く彼の姿を描いた絵を、彼は、隙間から覗き見られるだろう。それは分かるが、それを試す気になれない前に、それを試すにはどうすれば良いか分からない。何故分からないかは分かる。絵がないからだ。それは痛みや恐れとしては少しも感じられないが、もう酷く差し迫った事として身を危うくしているのではないか。また階段を駆け下りるべきなのかと見回すと、同じような白く暗い階段が、どちらを向いても幾つも幾つも奥へ脇へ見付かって、周りは階段ばかりになった。それもどれが上りなのか下りなのかもはっきりせず、用済みに

なって捨てられて、奥の明るい隙間を囲んで、乱雑に積み上げられているだけのようでは、取り敢えずどれか一つへ駆けて行こうと言う気も萎える。絵がないなら、そこはもう全く抜け出しようもなく絵の中であると考えてみるしかないが、考えてみても仕方ないのも確かなので、彼は考えるのを已めた。しかし、何を考えるのを已めたのだろう。慌ててそれを探したが、何も浮かばなかった。絵の中であるかどうかなど、取るに足らない。もっと他に考えていたのに、迂闊にも捨ててしまった。或いはそれは、彼を良い方へ導いているか。それで彼は、目に入る全ての階段を、体を使わなくても、一気に同時に、駆けて行ける。何度か体の向きを変えただけで、全ての階段を駆けた。いや、そんな筈はない。向きを変えられる体など何処にあるか。向きを変えていたなら、それは奥の明るい隙間であるしかなく、そこから漏れた僅かな光りが階段を順に舐めるのを、そこを駆けていると彼は見誤ったに違いない。向きをぐるり一周させた隙間は、そのままどちらにも向いて、一本の光る筋のように立って、そこを覗けたとして、その奥を見出せるか怪しい。しかしそうして全ての階段に満遍なくその光りが届く。階段は一つに溶け、ただ白く暗い背景になって落ちて、その上にその何処かに居る彼の影が映ると、彼は、その影に寄り添って、ただ光る筋のように立つ隙間を、見上げるようにして覗いた。その明るく拡がる奥に、光る筋のように立つ隙間を覗く己の姿を、彼は、何か別のものを見付けたように、見

て取った。それは奥の明るい隙間が、もう一つの隙間を覗いているような姿で、その覗かれている方の隙間は、覗いている方の隙間の向こうに隠れているようでありながら、その奥の明るい拡がりの中の、隙間を覗く隙間の姿をはっきりと見せて、（二〇二二年二月二十二日）

（入念に検討され…）

　入念に検討されやっと固まった計画なのに、変更になったらしい。誰もそれを知らされていなかったのか、皆、途方に暮れるようだが、その変更で危機は回避されたので、彼らは慌てる風もない。彼だけは、知らされていた、それもその変更されるよりずっと前、変更など誰の頭にもまだなかった時、既に。その結果、彼独りが、その危機に直面させられている。変更になった計画は彼らが行うだろうが、それに係わろうにも、彼らとの隔たりはもう、彼には取り戻しようはない。計画は全て彼らが持ち去り、新たに練られるかも知れない計画の材料も、彼の手にない。それで彼の身は、呆れる程に危機の為すが儘だが、何が危機か、影も形もない。多分彼らには、その形は酷く大仰に見て取れて、それに戦きながらも、その脇を恐る恐る彼らは通り過ぎて行くのだろう、その

変更された計画に抜かりがなければ。そんな彼らと全く別の所に居る彼に縋れるものがあるなら、勿論それは、危機の影も形もない中に身を委ねて、そのままにして居られる事だけ。それは、少しも何にも縋れていないに違いなく、それなら、その縋れていないままで居られる事に縋っている、とでもして置くか。遠くで、獣の群れが競って吠えるような、赤児の群れが競って泣き叫ぶような、微かな響きが、ゆらゆらと揺れている。或いは少しも揺れていないような。彼の耳にはそれは、変更された計画の救いようのない過ちに聞こえる。危機を乗り切れず、その餌食とされた彼らの、何処へ向けて良いか分からない叫びが、恐らくは彼の所にだけは届いてしまうに違いない。しかし空耳でないとも確かめようはなく、それなら寧ろ空耳と決め付けて、その響きを耳の中から振り払いたいが、却って、危機の餌食とされた屍の山が、鮮やかに目の前に浮かんでしまう。しかしその彼らの姿が、どう見ても馬鹿げていて、彼は笑った。すると屍の山は何処かへ弾け、彼に笑われているのは、笑う彼の姿になって、彼に迫った。己に笑われるしかなく、しかもその笑いを止められない彼自らが、危機ではないか。でないにしても、その危機の影の尻尾にでも、彼の身は懸かったのではないか。止まらない笑いは、彼にはそれは、己に笑われ続けるしかない事だろうが、彼でない方からは、全く別の事に見えるに違いなく、それが見えないのは寧ろ幸いで、いや救いようもなく幸いで、その救いようのなさに、

救われているに違いない。そう言う事にしてみても、或いはしてみなくても、笑われ笑う彼は、何も変わらないままに、何処かに辿り着いたようだった。叶うならそこは、その彼でなくなれる所であって欲しい。そう願えばそれにもその願うなりそうで、急いで彼は、そう願うのを已めた。或いは已められずにそのよういを引き摺るしかないようでもあり、その確かめようのなさが纏わり付くようで嫌だが、気が付けば、その嫌さに身を委ねるしかない彼だった。そうして、笑いを乗り越えただろうか。答えは要らない。求めたくもない。それならきっと、乗り越えたか乗り越えなくても良いかだろう。それを彼は素速く笑った、少し先の獲物に力任せで飛び掛かるように。そうしてしまった事に驚いて直ぐに身を引いたが、取り返しは付かないのだろう。笑えるものはなくなった。或いは、初めからなかったのでは。笑える己と笑えない己を天秤に掛けてみようか、でもどうやって。危機の影の尻尾が、鮮やか過ぎて見分けられない色を出し、ゆらゆらと揺れる。笑えないが、それはそれでどうと言う事もなく放って置けた。いや放って置かれるのは彼でありそうで、危機の影の消えた、揺れるだけの尻尾と戯れていれば、（二〇一二年二月二十四日）

（小さな澄んだ玉が…）

　小さな澄んだ玉が、ゆっくり回りながら少しずつ脹れながら少しずつ濁って行く。一回りする前に、濁りは偏って、すっかり濃い影を玉の回る方へ引き、そこに深い彫りを描くと、ぽとりと玉は何処かへ落ちて、次の澄んだ玉が、恐らくその落ちたのと逆の方へ僅かに伸びて、また回り始める。その玉を順に数えていれば、温かい。その温かいのを、それを数え始めるずっと前から知っていたかのように。その知っていたかのようであるのに躓いた。もう玉を数えられない。誰もが躓く訳ではない。直ぐ後を来ていた躓かずに数え続けた者は、その広い所を出て、狭い所へ行った。躓いた者は逆に、その狭い所を出て、広い所へ行く。しかし行ってみれば、案外そこは広くない。或いは、広さに値打ちがないと分かってしまった。では何に値打ちがあるかと言えば、言うまでもなく、躓かずに数え続ける事だが、そう分かってみても仕方なく、広くなかったそこを、値打ちがなくても広くして行くしかない。それには憶えている事全てを忘れなければならない。しかし憶えている事とは何だったか、それが思い出せずに、どうしてそれを忘れられよう。忘れられないなら放って置くしかないが、それは広い所に来た自らをも放って置く事だ。或いは躓いた時にもうすっかり自らを放り出していて、それを今気付いただけかも知れない。いや、躓いたかも定かでない。躓く前から、何を見ても考えても詮ない所へ、迷い込ん

でいないか。そして、そこで見て考えられる事が全てなのだと思い込んでいないか。温かいものを取り敢えずは探そうか。他に探せるものもなさそうだし、温かさだけは詮なくもなさそうなので。そう思えば全ては温かそうだが、そうして拡がり過ぎたせいか、全ての温かさが一時に冷めた。それを求めていたのではなかったかと勇むと、その冷めた中に、刻まれた銘文を見付けた。内容などどうでも良い。どうせ考えられる事であるに過ぎず、何であれ考えられる事は虚しい。それなのにそれは刻まれなければならず、実際に刻まれ、そしてそれを見付け、その見付けたのを一つの事として数えた事、それを奇貨とすれば、次に何が起ころうと、それをもう二つ目の事として数えたも同じ。そうして初めの一つを数え終えたのなら、もう忘れなければならない事も全てそちらへ捨てられた筈で、そこから、忘れなければならない事が起こったより前まで、立ち戻って行けそうだ。ちゃんと戻れたかどうかは知れないし知る用もないが、彼の居るそこは、どう見ても、まだ一度も使われた事のないような土地の有り余る広い所で、古い匂いの風が遮るものもなく舞って、灰色の埃を巻き上げている。土を舐めると、土ではなかった。土でない土で出来た土地を、どう呼ぶべきか。しかし、「土地は、あなたに呼ばれるのを拒むと言っている」と埃の中に霞んだ声がした。「言う訳がない。お前は誰だ。土でない土を舞い上げた埃だ。お前が、呼ばれるのを拒むんだ」と彼が声を荒げると直ぐ、埃は消え、風

は澄み渡って匂いも消し、荒げた声も声など一切上げなかったように吹き飛んだ。急な静けさが彼を縛った。声を奪われ土地の名も呼べず、縛めを解く術は澄んだ風の彼方に求めるしかない。流刑にでも処せられているか。その手掛かりを探るでもないが、土でない土を掻くと、直ぐに手応えが来て、また銘文が掘り出され、読むと、その内容は決して考えられる事などではなく、土でない土へ通じる、そうと分かっても何だか分からないもの。いや彼はそれを少しも読んでいない。土でない土を掻くように、その銘文の字面に爪を立てて引っ掻いているだけなら、銘文も見せ掛けで、それは、まだ数を数える事を知らなかった頃の、盛んに土を引っ掻いていた跡。そして嘗てそうしていた事は、忘れなければならないか、そうでないか、それは必ず紛う方なくどちらかで、その正しい方を直ぐに選べなければ彼は赦されず、時はなくなり、彼の迷いが二つに引き裂かれるなら、その数えられた一が、受けなければならない刑罰で、

(二〇一二年二月二十九日)

(やっと、欠ける所なく…)

やっと、欠ける所なく一つ小さな事の、ただそれだけをした。何故小さいか

と言うと、高い空の下で初めてそれを仕遂げたからと、ギザギザした山あり、クネクネした谷ありの長い時が掛かったから。空は見渡せる最も高い晴れ渡る空、時は思い返せる限りの最も遠い時で、その暗く狭い時の果てのその先には、ぼんやりした分厚い岩盤が、何処までも冷たく広がるらしい。その時の長さの中へ落ちて行きそうになれば、高い空へ放り投げられたような眩暈に襲われるが、それが一瞬に過ぎると、その長かった筈の時が、見窄らしくも萎んでしまうのは、どうしてか。恐らくはもう、時の長さも空の高さも、それらと溶け合い交じり合うように身を転がせる所でなくなっているから。そのどちらも、石ころや砂原や水溜まりと同じような、背景を埋める事柄になってしまった。その霞む遠景に、風を貫く歌でも捧げるように、見定められないままの私の方へと伸び上がろうとする、傾く淡い影がある。しかし、歌おうにも、歌になっていない。どうやら欠ける所なく仕上がっていなければ、歌は風に馴染んで流れてしまうらしい。歌を捧げる必要などないのだと、私はその影に伝えたい。まだ一つ小さな事の、ただそれだけが為されたばかりで、それは背景へ去るどころか、血に取って替わる程に体中を巡っていて、平生の気分の中にも染み渡るままなので。常の事とは言え、風に身を添わせようとするからか、傾く影は先走り過ぎてもいるし、遅れを取ってもいる。もう何も元に戻らないが、一つ小さな事が、その影と私の隔たりを埋められるとも望めそうだ。寧ろ私には、元

に戻れた私に出会す方がずっと厄介だ。或いは影は、そんな私に歌い掛けようと躍起なのか。遅れを取り過ぎる影でもあれば。そんな風に影は、答えを見付けようとしかしない。そして慌てて答えを捉まえては直ぐに忘れてしまう。答えなど所詮、どれも誤りに決まっているのだから、直に忘れて正解なのだが、それを繰り返すばかりでは先へ進めないのに。尤もそれが影の遣り方であれば、そうであるしかない。或いは、それでも歌い掛けようとする影が先走り過ぎているのなら、正しさも誤りも影は自ら抛ち、一切が嘘でもあれば本当でもある所へ潜り込もうと身をくねらせ、石のような静かな姿を得ようと急ぐだろうか。先走りし過ぎた所で急いでみても何にもならない。そんな事は影も直ぐに気付くだろうが、先走った後では後の祭り。そんな風に影は、まるで自らが誤りの果ての結末のように、常に足元を揺さぶられている。ただ私にそう言えるのは、偏に、一つ小さな事を私が仕遂げたからで、それまでは私の足元も、影程ではなくても酷かった。いやそれは見掛けだけ、或いは影にばかり歩調を合わせてしまったからで、私の辿った足取りを振り返れば、少しも揺らいではいない。ただ見ようによっては、揺らぐどころか、うっかり命を落とし兼ねないような振り幅を突き抜けた事も、数えたら切りがなさそうだが、それらも過ぎてしまえば、なかったも同じどころか、私の足元を固めるに大いに役立ったのだろう。と振り仰ぐと、影は益々淡く直ぐそこに傾いて、先走っても遅れてもなく、ひ

ょっとして先走ったり遅れたりした私を待っていたような物腰で、誰になど捧げる必要もないのを、私よりずっと前から良く分かっていて、寧ろそれを分かり過ぎていて、そのせいで却って私を、高い空と遠い時の方へ向かわせてしまったのではとも疑われる。そうしてそれが、私と影に酷い遠回りを強いたにしても、仕遂げられた小さな一つが、それを近道に変えられるとも望めそうだ。しかしそれをその通りに望んでしまっては、一つ小さな事の傍らの私と影は、互いを擦り抜け、互いを取り逃がさないとも限らない。いや必ずそうだし、そんな危うい事など出来て良い筈がない。つまりは、私と影とに係わる望めそうであるだけの淡い期待こそが、欠ける所のない一つ小さな事によって導かれる、ただ一つの望みであるに違いなく、（二〇一二年三月二五日）

（私が、その淡い影で…）

　私が、その淡い影であるなら、私でない誰かも、その影であるしかない。それを呼んでも誰も応えないが、その呼ばれた中の空っぽが、その誰かでないとも限らないなら、呼んだ甲斐はあったかも。その証しでもないが、その誰かの身は空っぽなまま、犬に喰い散らかされ、干涸らびて風に転げ、その先へ落ち

たらしい。その落ちた斜面はずっと忘れられていたし、その身の欠片がポロポロ零れて行っても、忘れられたまま暗いまま。見出されたのは、そこへ、その傾きと殆ど水平な陽が差した時だが、それ以前にそこへ陽の差した事があったか知りようもない程に、もしそれがあったのなら途轍もなくそれは久し振りで、その斜面に転がっている殆ど無限に長い影を引く物共が、一斉に色めき立つのも無理からぬ事と思って見ると、色めき立つ物など一つもない。それならと、彼はそこを降りて行く。でも、それならって何。でもそれは彼の問いではないので答えは要らない。その要らない答えばかり詰め込んだ、硬そうな四角い箱が、斜面に僅かに突き刺さって、今にも転げ落ちそうに斜めに下を向いていて、差して来た陽の重みで益益傾いて、転げ落ちるのは時間の問題。でも、時間の何が問題？　そんな問題があるなら解いてみたいな、と思った誰かが、箱を揺さぶる。そいつはキラキラと体を飾り付け、腰付きからして踊り子で、そいつの殆ど無限に長い影の震える中に身を滑らせ、その箱の鳴るのを待って息を潜める彼は、段々と、その影の中の影になって、どうやらそこを出られなくなったらしい。酷い話しだと思うなら、彼の代わりに待つとしよう、私が。そしてまた、その淡い影。淡いが故に、その周りを囲む淡くない全てを擦り抜けて、欠ける所なく淡い。ああ、と私でないなら踊り子が嘆く。何てややこしい所へ来てしまったんだ。ややこしい癖に、どうしようもなく何処までも傾いている

だけで、ずっと平べったい。複雑怪奇に歪んでいてくれたら、どれだけ気が楽か。箱はどうしたの、と踊り子でないなら私が尋ねる。それは送り主に訊いてくれ、と踊り子でないなら彼が答える。それが答えなの？　だとしたら空っぽだね。いや空っぽじゃないよ、端っこに少し空いた所があるだけで。それは大変、淡い影なら、少しでも欠けた所があったなら、ふっと消えてしまうよ。直ぐにその空いた所を埋めないと。淡い影をそこに描き写すしかないね。でも遣り方が分からないから、影は、その空いた所を逸れて逸れて、逃げ切ったと思えたのは、蓋の開いた空っぽな箱を見付けたから。箱は一つではなく、数え切れず積み上がって、下の方から歪に潰れ掛けて、捨てられた蜂の巣が自らの重みで朽ちて行く形。淡い影はその箱の数だけ粉々に散った。と、そんな易しい夢を誰かが見ただけで、淡い影はそのままそこに。そことは、その空いた所。そのささやかなそこを、淡い影が綺麗に埋めて、いや、淡い影の描き写されたものが、その空白を埋めていて、それはどう見ても空白と見紛うしかなく、そうした様には、ただ見惚れるしかない。それに見惚れるのは、その何処からか、その鳴る音が無数に聞こえているから。そうに違いなくても、音は確かめられない。確かめるまでもなく。そのままでそうして、と呟いて、淡い影は守りの姿勢を取る。守りの姿勢とは、何も考えずゴロゴロと好きに転げ回る姿勢。きっとそれはもう、淡い影ではなくて、淡いよりもっとふわりとした、幾らかの

重みと匂いのある、陽を透かす血の温かみを湛えた、空っぽを裏返したようなもの。これが楽しいのでないなら楽しいなんて、ない。そんな空白がそんな空白を眺めている、小さく小さく。斜めから、まだ少しだけ弱くても明るい陽が差すように。それで？　と、犬に食い散らかされた誰かが、その散らかった身の一つ一つで朗らかに笑えば、淡い影は、それが何者であったかを、と言うより、その何者であったかと問うしかない問いを、淡く過ぎ去った中に見付けた気にもなれて、（二〇一二年三月二十六日）

（うっかり影に影が…）

　うっかり影に影が映っていると見えてしまった。見直しても、もう、影は影を映していて、映している影と映されている影を見分けなければ、恐らくただでは済まない。下手に目を背けたりすれば、そこに凄い力が加わるかして、凶器となった影に襲われそうで、実際、影と影の狭間の奥に、その凄い力に繋がりそうな唸る音も、微かに聞き取れないか。しかしこれまで、影と影を見分けようと試みた事さえない。影にじっと目を凝らした覚えもない。常にゆらゆらと移ろうものを、どれも影と見做し、その流れ去るに任せていて、そんなもの

に目を凝らせるか考えてもみなかった。それが今、ちゃんとそれをしなければ身が危ういとは。失敗は許されない、と言うより、失敗はあり得ない、何が失敗か思いも及ばなければ。仮にどんな酷い事になろうと、何の道そうなるしかないのかも知れなければ。そしてもう、どちらかが火の影で、どちらかが水の影でなければならないとは。どの様に、その二つが映し映されるのか。抑も、火の影とは、水の影とは。朧にその在処に見当を付けられたにしても、目を凝らせるまでには、その姿は揺れて定まらないだろう。とは杞憂で、寧ろ、火であるなら全て火の影であり、水という水は水の影になって溢れ、二つは必ず何処かしら混じり合い、それがばらければ、互いに支えを失い消えるらしい。つまり、火は、どれも火の影であり、そこに必ず水の影を映し、水の影は、どれも火を映して水である。しかしそれは何を見ているのだろう。或いは何を見損なっているのだろう。火や水やその影に目を向けるより先に、見て確かめておかなければならないものがあったのに、それを怠ったに違いない。それについては、今となっては分からないどころか、今となってこそ分かる。それは、移ろいも流れ去りもしない、他の諸々を遣り過ごしてもそこを動かない、小さな痩せた一筋の影に違いない。或いは全く別のものかも知れないが、分かる限りでは、そう分かるしかない。それは、見えていたのに見なかったか、見えていないのに見ようとされていたか。そんな穿鑿は徒労かも知れないが、そうした

徒労の積み重ねをしか当てに出来ないようでもある。何故なら、過ぎた事は戻らなくても、その過ぎた事しかなさそうなので。火と水が互いの影を映し合って燃えて流れるのは、どちらも過ぎた事だからではないか。するとその火でも水でもない痩せた動かない影が、ふわりとぼやけ、浮き上がろうとでもする傾きの方へ流れて消え、その消えていく中に姿を見せる影が、火にも水にも触れる。しかし、火にも水にも触れるとは何の事か。分かる限りでは、どうにも分からないし、分かる限りを越えても分かりそうにない。そうして消える影に寄り添おうとするだけなら、火も水も知らないし、何を知らないのかも忘れられれるままに、影を映す影もまた見失われるのではないか。いや、見失われるどころか、ただ影を映す影だけがあって、他には何もない。恰も影を映す影は、その何もないための装置であるかのように。その装置がそこに働く限り、何もないままだが、その働きはそこにあるのだから、何もない訳では全くなくて、その働きによってそこにあるものへと、影は落ちて行き、あるがないを映し、ないがあるを映す影にでもなるしかない。或いはそれは、火と水が、あるとないとに、置き換わっただけか。そうであるにしろないにしろ、影を映すままに、影は影であるしかない。分かる限りでは、そう分かるしかない。何故分かってしまうのか。それを分からずに仕舞えば、それで終いなのに。恐らくは、映す影も映る影も、終いなのに終いにならない方へ逃げ延びるしかなく、その

終いと終いにならないが互いを映し合う中へと滑り込んで行くしかなく、その影の姿を振り払えずにいるに違いない。そこにないのは、ただそれを断ち切る術だけであり、それがないばかりに、影は、影を映すまでに、影と影の狭間に揺れる濃淡の限りを尽くして、（二〇一二年三月三一日）

（壁がない…）

　壁がない。あってはならない壁だったが、なくなってみると、なくてもならない壁だったようで、そんな壁であれば、ないにしても、まだあるようなもので、なくても構わないままに、あってはならないし、なくてはならない。などと言っても壁はもうない。ないものは、ないからには、あってはならない。どうであろうと、ないものはない。ただそのないものは、ないものとしては、あるしかない。そのようにでもあるしかないなら、それはやはり、あってはならないままの壁ではないか。こんなどうにもならない事を考えさせてしまう壁であれば。そうしてそれがなくなってさえ、あってはならないままであるならもう、どうにもならない考えを巡らせるしか、しようがない。それ程の壁が、跡形もなく、ない。それで何を考えられるか。その前に、何が壁に換わって、そ

こに来ているか。何かは知れないままでも、その置き換わったのだけは分かっていなければならない。ちゃんと、身振りか何かで表せる程には。しかし、あってはならない壁さえなくて、何かの振りをする身など、ありそうにない。しかし身も壁もないなら、それに縛られたり行く手を塞がれたりもしない。しかし何が。その何がが知れなければ、壁や身のあるなしとも係わりようがない。しかし壁がないより前に、その何がが、もうなくなっていたのではないか。しかしでは何が、その何ががをなくしたか。そこへ遡ろうにも、どうしようもないなら、そこは壁に塞がれている。その壁にぶち当たるなら、その身に縛られている。しかしなくした何がは、探し方を間違えているだけで、実はなくしていないのかも知れないなら、その壁も身も、その何がに含まれるほんの些細な何かの姿。壁や身に塞がれず縛られず、ただ何が、だけが、何が何が、と何処までも続いて行く。それを言い換えようとするなら何とでも言える。それは、何処までも壁であるなら壁であるし、ただの身であるなら身であるまま何処までも身であるし、影でも光りでも波でも泡でも良い。何と呼ばれようとそれは、何が、であり続けるしかない。それでやっと、壁がない事、ない壁に何かが置き換わった事、それを、身振りで表せこそしないが、それなりに、分かり得る限りは分かるようでもある。で、分かるからにはやっと、壁がない、もない。つまり、その壁のあるかなしかが、なしになる。と、分かり得る限りには言え

る。勿論、分かり得る事など知れているが、分かる限りに留まろうとは出来る。
ただその留まろうとして、それが何になるかは、もう分からない。そのように
分かり得ると分かり得ないは重なり、ひっくり返ってもいそうで、そうである
なら、何が分からないかも分からない。こういう時はどうすれば良いか、
などという問いも呆気なく消える。それでも、そこに何が来るか。喜びが来る
なら来る。悲しみが来るなら来る。来ても直ぐになくなるだけ。壁がない、も
ないのであれば。と、ここで終わりに出来る。違う。終わりに出来る事など一
つも来ない。その来ない事で終わりと考えたくもなるが、それはそのように考
えたいだけの事。しかしそうして考えたいだけの事が一つでもあるなら、壁が
ない、もない、さえもなくすような、大きな変わり目に差し掛かったのでは。
などと考えたくもなる。そうしてどれも考えたくもなるだけなら、考えたくも
ない事へ向かうしかなく、それをそう考えたいだけの事に終わらせないために
は、恐らくは、壁とでもなるべきものがなければなさそうだが、ある筈はない。
或いはそんなもののある筈がなくて、壁を見付けられるかも知れない。しかし
かも知れないだけではかも知れないだけで、何も始まらない。いや、その、かし
もとないを消して、知れる限りを知って、一体ここから始まる事などあるか。
それさえ分っていなくて、壁がない事の、何を分かるようであったか。その分
からないようなら、終わりに出来ても出来なくても、（二〇一二年四月一日）

（卵の割り方を…）

卵の割り方を忘れるのは、そう決まっていたらしいが、卵は孵すべきではないか。割られた卵に未来はない。腹に抱いてもいないし手の中にもないのでそれは何も困らないが、そう決まっていたらしい事が、もっと他にもあるようなのに、その一つも見付けられないのは気懸かりで、心当たりが卵しかなければ卵を探すが、その割るか孵すかで、探し方も違って来る筈。しかし割り方さえ忘れ、探し方など見当も付かなければ、ここは卵ではなさそう。ただ、卵と取り替えても分からない程に卵と似た何かではあるしかなく、それは割られるでも孵るでもなく、そのどちらとも成らずに擦り抜けて行く、姿ばかり卵にそっくりな、そして擦り抜けてしまえば、卵とは似ても似つかぬもので、それが、卵の割り方を忘れるよう仕向けもしたか、卵と何の係わりもない事によって。それ、ばかりではない、他の何も卵とは係わりない。何処まで遡っても、卵は割られた事も孵された事も一度もない。では卵の割り方を忘れるとは、そして、孵すべきではないかと問われる卵とは。どちらも、まだ見付かっていない別の事の替わりに、そうであるだけ。尤も大抵の事はそんなものだろうが、しかし、

卵の割り方を忘れる、のでなければならず、他の言いようなど全くあり得ないのも確かで、すると卵ではなさそうどころか、ここは卵であるしかなそう。そのなさそうしかなさそうなら、きっとそうであるしかない。卵の割り方を忘れたまま、卵は孵すべきでないか、の答えも見付からないままであるのが、ただ一つのどうにも困る事であるしかない。それはつまり、孵すべき卵を割ってしまって一体どうする積もりか、それともそんな風に全てを台無しにして、そこから何かを始める積もりか、と、そんなような事について答えを探さなければならないようでもある。そう出来るならそれで構わないが、割った事もない卵の割り方を忘れてしまうようであっては、ここが、何かを求めて彷徨える所でないのは明らかで。彷徨った果てが、ここかも知れないし、初めから終わりまで少しも彷徨えていなかった、その果てかも知れないし、そのどちらでもないのかも知れない。恐らくそのどちらでもない。ここは卵であるしかないのであれば。その卵も、割った事もない割り方を忘れるとあっては、それに係わりようもない。いっそ卵ごと忘れてしまえば良いのだ、とそう考えられはしても、その忘れ方も、なかったか忘れられてしまった。そうして困り続けるしかない。いや困るだけで、それを続けられはしない。困り続けられるなら、卵の割り方を忘れるのは、少しも困る事にはならない。そうして居れば、なるようになるだけだから。そうではなく、何一つなるようにならない、その手始めのように、

そう決まっていたらしい卵の割り方を忘れる事が、ここに立ち塞がっているのであれば、この先は愈愈、ならない事ばかりが数限りなくあって、そんなものを数えられる筈もなく、何処かへ埋もれるしかない。いや埋もれるなら、それも困らない。忘れた卵の割り方が、埋もれようとするのを跳ね返すが、そんな危うい遣り方が何時まで続くか。しかし跳ね返せなくなっても、埋もれそうにはない。ならない事の中に、埋もれるものになれる筈がない。それでまたここは卵であるしかない。恐らくは、そうあり続けるのは拒まれるまま。或いはそれが、困らない方への出口か。卵も、忘れた卵の割り方も忘れ、ただ拒まれる方へ拒まれる方へ。そうしていれば、その動きの中に滲み出す、卵の割り方を忘れるのが何であるかを、闇に漏れる微かな光りのようにでも見付けられれば、もうそれが、卵でない他の事であり、気懸かりも幾らか収まりそう。或いは逆に、気懸かりなど吹き飛ばす酷い事になっても、気懸かりからは解き放たれる訳で、そうして卵の外へさえ出れば、きっとそこは、ここではない。或いは、そんな見通しこそが、どんな酷い事より酷い気懸かりの種でもありそうで、（二〇一二年四月十二日）

（逃げてはいけない方へ…）

逃げてはいけない方へしか逃げられないにしても、逃げてはいられる。逃げられなければ、どうなっているだろう。向きも変えられないのだから、試しに逃げるのを已めてみるなど、もっと出来ない。いや、逃げていけない方へ逃げているなら、逃げるのを已めるしかなくなる方へと己を追い遣っている筈。どうなるかは直に分かる。しかし逃げ始めたのは何が切っ掛けか。振り返る余裕もないが、振り返っても答えは恐らく見付からない。静かな闇の中へ、今付けたばかりの新しい足跡が順に消えて行くだけ。ただそれは、振り返る余裕のなさに、そう思えてしまうのかも知れず、少し余裕が出れば、光りが遠い昔にまで届く様が、思い浮かびそう。しかしその方が、答えは決して見付からないと知らされるだけかも。光りが届いただけ、つまり時を遡る程、そこには空っぽしか見当たらなくなるだろうから。そうに決まっている。そんなものなど見ないでおくに限る。しかしどうやら、逃げれば逃げる程、闇の中へと逃げて行くのでないのがはっきりして来る。その、光りが届くだけの空っぽの方へと逃げているに違いない。一度も向きを変えた覚えがなければ、ずっと前から、そちらへ向かっていたのだ。その逃げてはいけない方へ。であれば、逃げる向きは幾らでも変えられる。ただ、幾ら向きを変えても、その前には、先に光りの届いている空っぽしかなく、向きを変えても仕方がないだけ。ではあっても、そ

こに空っぽだけはあるなら、ただ向きを変えるばかりではなく、逃げ足を重くしたり軽くしたり、足音が響くよう強く踏んだり、忍び足にしてみたりと、あれこれ試せば、それに合わせて色々に変わる空っぽを見られるのではないか。しかしどうやら、そうさせない何かがあるらしい。足取りは試せているのに空っぽが同じままか、或いは、足取りから変えられないかも定かでなく、逃げているかも最早怪しい。と言うより、逃げていようといまいと構わない。それはそうだ。どうにも変えようのない空っぽしかないのだから。すると空っぽは、覚えのない事ばかりで満ち、覚えがないなら、幾ら満ちても空っぽのままのようでもあるが、その何について覚えがないかは、一つ一つ色形は見分けられ、どうやら匂いもはっきり嗅ぎ分けられる。ただ覚えのないままでは、当たり前だが言葉とは繋がらない。様々な草木を一種類ずつ揃えた、植物園の温室のようにもなってしまった空っぽだが、勿論一つとして手に取れる草花はなく、ただどれも、逃げ始める切っ掛けと結び付く事柄ではあって、その一つ欠けるか別の何かが加われば、逃げなくて済んだか、違った方へ逃げられたに違いない。そうして空っぽは、変えようがないどころか、あり得ない程に変わっていて、しかも刻々、色形匂いの組み合わせを揺らめかせ、それは幸運と不運が綯い交ぜのようで、その幸運と不運にしても、例えば、生まれた幸運と生まれなかった不運、生まれなかった幸運と生まれた不運とが、代わる代わる遣って来て、

しかもその入れ替わる速さも一通りでなく、一つの不運や一つの幸運が、長過ぎるようだったり短過ぎるようだったり。そしてその内に、それら変わるのを已めない全てを、一纏めに出来る言葉があると気付いた。それも当たり前だが、覚えのないままでは、その言葉とは繋がれない。しかし、その空っぽを突き抜けた向こうでは間違いなく繋がっていて、そのせいで、逃げていられる、或いは逃げなければならなくなったのでは。いや全くそうではない。何となく治まりの良さそうな考えを浮かべただけ。それは成り行きを悪くしている。不運ばかりの塊が、双子の片割れのように直ぐ隣に座り、その指差す彼方の一点に、あの植物園の温室擬きが、そっくり空っぽを守っているかも知れないようでも、それが今更何の用をするか。ただその双子の片割れへ向けてなら、頬の裏に僅かに残して置かれた微笑みを滲ませて、その言葉は言える。実際、口に出した。ただそれは、あり得ない程に覚えがなく、（二〇一二年四月十五日）

（縛られているなら…）

　縛られているなら訳なく解いてしまうが、緊い縄がやっと少し緩み、その心臓のような鼓動が伝わると、お前の手は止まる。止まればもう、取り逃がして

いる。しかし早速次が手に滑り込んでいて、やはりまた解きに掛かってしまい、鼓動が伝わって、また取り逃がす。そうして机の上か何処かに並べられて行く。誰かに望まれたようでもなく、それらが何かを始めるようでもない。鼻を利かし、どうやら食い物だと分かると、それらは見る見る遠ざかる。それはそうだ。食える物は食い尽くし、もう食える物はないし、あっても食わない。では今更何故、食い物が手に落ちて来るか。遠ざかってもまだ、その数は順に同じように増え、重ならず少しずつ間を空けて続くので、遠目には繋がって延びて、ゆらゆら曲がる一本の縄とも見紛う。遠い端は、ゆらゆら揺れるのもぼやけ、消えはしないが、消えないのは、その見掛けが覚束ない分、その音と鳴らされて伝わって来るようだから。或いはもう、音が見掛けを補って済む時は過ぎ、音だけで姿を消さずにいるか。その音の繋がりの端の端、それ以上になく音でしかないに近い塊、それなら一つ食べてもみたいがどうか。どうかも何も諦めるしかないが、忘れられない。何故今更、忘れられない食べ物を見せられなければならないか。考えるだけ無駄だが、まだ食いたい身なら逆にお前は食われるかも知れない身でもあり、食われないよう周りに気を配るべき、とも限らない。食うも食われるももう、何の色形も重さもない余所事で、それが、ほぼ音でしかないに近い塊の辺りに映し出されているだけの方が、ありそうな事であり、見失わない限り、ぼんやりとそれを見続けるしかない。

しかし何を見失わない

でいるだろう。見失われそうなものさえ初めからなかったのでは。そうなら、食われるかも知れないよりずっと危うい。或いはもう危ういは通り越し、必ず直ぐにも終わりが来ると定まってしまったのでは。それでもお前の手だけは、始めてしまった戦いに終わりはないかに空を切り、切った空の皮を剥ぎ、掌に残ったものを掴み取ろうとする。それは稀にキラキラと薄っぺらい金細工のようだが、直ぐに空に消える。空に消えるなど何でもない。元々空に消えていたのだから。そうして稀にでも煌めいたなら、それを掌に掴めなくても、いや決して掴めるようなものではないそれは、自らを擦らせて、音でしかない塊を次々に吐き出している。吐き出す口は、その塊を求めるものを求めているが、それに応えるものは遣って来そうになく、自らが独りであるのを思い知る。それで、音でしかない塊は、出端から直ぐ、音でも塊でもなくなり、その褪せた色、萎えた形は、全く見定めようのない、全てをひっくり返す別の事が迫っているのを告げている。しかしそうでありながら全く全ては安らかで、そのまま揺るぎなく続いて行く。或いは、と言うより、先ず間違いなく、その二つは同じで一つで、その一つによって、音でしかない塊を独り吐くままの彼は、そこに居られる。しかしその彼の一つで二つの、輪を拡げて行くような働きによって、お前の手とお前は、狭い息苦しい方へ追い遣られ、もう後がない。或いは、後も先もなかったのを思い知る。つまりお前の酷く場違いな振る舞いのどの結果も、

二つで一つの事の前には紛い物に過ぎず、そのどれもが何処かに紛れて見付からないのが、せめてもの慰めと言えば慰めだが、後も先もない前には何の役にも立たない。しかし紛い物と言うなら、一つが二つのどちらも紛い物。尤もそう言い募ったところで、紛い物同士のドタバタ、にでもなるならまだ増しで。後がないなら終わっているが、後も先もないでは終わりようがない。ただ麻痺するばかり、とそう決めて掛かる訳にも行かないが、そう行かないのは多分麻痺するばかりだから。そう言えば、あの心臓のような鼓動は、麻痺の痺れが、やっとの事で解けて行く時の音だったかも知れず、それなら別に何を取り逃がしたでもなく、（二〇二二年四月二十二日）

（ぶつかり合っているようで…）

　ぶつかり合っているようでいて、音も衝撃もなければ、それらは何か別のものになって行く。元から別のものだった。それでも、ぶつかり合っているようであるのに変わりはない。なので、またもっと別のものになって行く。お前はその中に入って、それらと同じにならなければならない。戻れる所はない。そんなお前の来たせいで、それらはもっと別のものになって行くようだが、その

経緯については何も分からず、それらとの隔たりを思い知らされるばかりか、お前だけが別のものになり損なって取り残され、為す術なく裸に剥かれるしかない。剥かれても剥かれても、まだ剥ぎ取られる。裸には切りがなく、何処までも裸にされ続ける。或いはそれは、お前もまた、知らず、別のものになって行っている証しなのか。別のものなら、また一から裸に剥かれるだろうから。それなら、そのようにして、すっかりその中に入って、それらと同じになっているのかも知れない。そのそれらが見当たらない。それらと同じになって、自他の区別が付かなくなったから。独りにされる。それだけが続けられて行く。しかしそれで果たして独りか。次々に別のものになって行き、その度に別のものが剥ぎ取られて行くなら、独りのお前の居所などない。或いは、居所だけがあって、独りのお前は、そこに居られない。いや独りのお前は必ずそこに居る筈だ。他の誰に、その居所を守れるか。お前にしても、そこに獅嚙み付いてしか、お前で居られない。そうしてお前がお前の姿を探すと、長い曲線を這い上って来て初めてそれを見下ろすお前の姿を、少し明るい中に見付ける。いや、その曲線が俺なのではないか、そうに違いない、とお前は眦を決する。その曲線の美しさを分かり、それに感嘆出来るのは、それが俺であるからだ。ただそれは、俺の姿を探す俺に、何か間違ったものが目に見えないほんの僅か、擦り込まれているからでは、そんな疑いは残る。それでもその曲線の俺は止ま

らない。と言って、無限に向かって延びて行くのでなく、何処か決まった中を、滑らかに動き回れている。それは無限へと引かれる線より、ずっと伸びやかだ。尤も、無限へと引かれる線には何の自由もなさそうで、きっと退屈で堅苦しく何処までも何の変化も許されない。しかしそんな風に思ってしまえば、俺はもう、その無限へと向かう線でしかない己の姿を、すんなりと受け入れてしまっていて、どちらを振り返る気にもならない。俺はここに居て、ここが俺の居所だからだ。すると、予想されていた通りのように、同じ無限へと引かれる線が、何気なく何本も近付いては遠ざかる。それらは同じ筈なのに、少しも俺に似ていない。俺に俺を俺でなくすようにと誘っているとも見えるが、どうか。どうかとは、俺は何処の誰に同意を求めているか、とお前は辺りを見回すだろうが、辺りとは何処か、見当たらない。無限も見当たらない。いや無限の見当たらないのは元からで、だから無限へと線も引かれる。と言うより、線が引かれるなら、その止まらない限り、必ず無限へと引かれている。しかし見回す辺りも見当たらないなら、もう止まっているのでは。無限とは修復不能に断ち切られ、そちららから微かに血の匂いも嗅ぎ取れる。後一回だけ、何かを計算する事が許されていても、計算の仕方が分からず、何を計算したいかは分かっている筈だが、その仕方が分からないでは、その何であるかは言い表しようがない。ただその何処にあるかは明らかで、その何処で計算するかも明らかだ。それならも

う、計算の仕方など分からないで構わない。それをお前は、お前の這い上った限りの長い曲線を全て組み込んだ、曲線の塊のような壺のような形に見て取る。壺に見えてしまえば直ぐに萎んで、それはぼやけた点になって血の匂いに掻き消され、そのまま戻って来なくても、それを計算したのと同じものを得たに違いなく、その見えた限りの曲線の塊の壺の形の奥に身を潜め、二度と裸にされもせず、（二〇二二年四月二十八日）

（野火に囲まれて…）

　野火に囲まれて逃げ場がない。でもなく、やはり、見窄らしく揺らぐ、逃げ場を仄めかす見慣れた隙間が、当たり前のように脇に控える。火を弾く草が一列に並んで、そこだけ火よりも輝く暗い青い筋を引いて、そこへと走り込んで来るお前を、今か今かと嬉しそうに待ち受ける。そこへもう疾っくに突進している、何時もなら。その嬉しそうな草の様子など、ぼんやり眺めたのは初めてで。それは、走り出さずにいられなくなる程には、火が熱くないから。試しに熱さを計ろうとしても、恥じらうように熱さはしずしずと引き下がり、熱さの欠片一つにも触れられない。火とは、それを恐れて走る出すよう駆り立てる、

ぞっとする形とその動きを映すだけのものだったか。で、どうしたら良いか、何をしなければならないか。しかし、そんな風に考え込んでしまうのは、もうどうにも出来ないのを受け入れてしまったようなもの。相変わらず草の道は待ち構えているが、火の熱さがなければ、足は萎えるばかり。足を摩ると、その摩る掌に僅かに痺れが来ている。火に変わる、途轍もない切り札を手に入れた。直ぐにはそう思えたが、痺れはじわりと全身に拡がりもせず、体の何箇所かに点点と散らばるまま、それでどうなるようでもない。しかしそれで十分かも知れない。要所は全て痺れに押さえられ、それでもう裸にされたも同じ。或いは元から裸だった姿が、すっかり晒された。その裸目当てか、火の熱がじわじわと狭まって、それに炙られる体は、反ったり捩れたりで、そこにそのようにしかあり得ない形、熱と痺れとが闘ぎ合って初めて出来る形になった。凡そ体の形ではない。しかし肝腎なのは形ではなく、そこでまた熱に責められ、その形からさえ滲み出て行く痺れであり、そこにもう形もなければ、痺れはどのようにも痺れ放題で。そうなって、熱がやはり火のものでなかったとなると、それは熱でもない。痺れの端が幾らか屈折し、一見痺れではなく見えたもの。ないのは熱だけではなさそう。痺れで大抵が足りるらしい。或いは、知れるものの全ては、痺れが色々な風に現れただけのもの。それでやっと火の中を、一本の青い草の逃げ道へと突っ込める。それが逃げ道にはならず、そこもまた痺れであ

るだけと知れれば。走る足はなく、直ぐにそこに倒れ込む。しかしそれはお前ではなく、そのお前でないだけで痺れは消える。僅かに掌に残る痺れさえ振り払えば、反って捩れた体は元通りだろうが、その掌だけはその痺れるままのせいで、体も凡そ体の形でないまま。形が肝腎でないとは言え、その形しかないなら、体をまさぐって、形を掴み取るしかない。しかし余りに訳の分からない形では掴みようはなく、それでもまさぐり続ければ、それは消えた箸の痺れの形ではないか。痺れに形があればだが。いや痺れに形がないなら、その形が痺れそのもの。そうしてまた、痺れを何とかしなければならなくなって、己の裸の姿を見せ付けられる。姿と言っても形はない。恐らくは、形がなくて裸。形があるものは裸ではなく、裸に形を見るなら裸と真逆なものを見誤っているに過ぎない。いや、形のない裸にしても、痺れと比べれば、殆ど形であるのと変わりない。であれば裸は、痺れに溺れる者が掴む藁のようなもので、気休めの時間稼ぎにはなりそうだが、抑も痺れに溺れるのも、時間稼ぎであるしかなさそうなら、裸に何の用もない。そうであっても裸であるしかないのは、他に痺れを映すものがないからで、裸という鏡に映らなければ、痺れは、もっと捉え所のない有りようで、襲い掛かって来ていたに違いない。しかしそれなら火もそうだし熱もそう。痺れを映す鏡となって、痺れの果てのなさを仮にでも食い止めて来た。そうしてまたお前は、元から裸で野火に囲まれ、熱くもない火の

熱さを逃れようと、草の道へ走るだろうか。痺れがそれを許すだろうか。時間稼ぎとしてなら許すにしても、稼いだ時間の使い途など、痺れに貫かれて行く時間稼ぎのためでしかなく、（二〇一二年五月三日）

（計算出来ない事を…）

　計算出来ない事を計算し続けて来たらしい。他に出来る事もなかったので。そう気付いたのは多分、もう計算は要らなくなったからで、そう気付いてみて要らなくなったのではない。計算が要るか要らないかを決めるのは、何に気付く気付かないなどという、私事とは関わりない。しかし計算しか出来る事はなく、その計算が要らないでは、何とも居心地が悪い。要らない計算など続けられるだろうか、しかも計算出来ない事を。しかし、こんな考えを巡らせる事が、計算出来ない事の計算であって、他に出来る事もないのであれば、何も変わっていない。いや、計算出来ない事を計算し続けて来た事に気付いたのは初めてで、考えてみるまでもなく、これは途轍もない変わりようではないか。そうしてその変わりようを、要らないにも拘わらず計算してしまうのだが、その計算はまるで出来ていない。勿論、要らないのだから、出来なくて少しも困らない

し、残念とも思わない。その困らなく残念でないのも、計算出来ない事の要らない計算であるしかない。そのように、何を取っても、一々要らない計算として締め括られて行くなら、要らない計算など正に要らなくて、何事もただ、いきなり締め括られて済む筈で、それらの様子をただ眺めて居られるなら、計算する他に出来る事が出来たに違いないのだ。などと考えを巡らせてしまえばまた、計算出来ない事の要らない計算なのだが、あらゆる事のただ締め括られるだけの有り様を眺めて、他の一切を顧みないで居られるなら、計算とは縁が切れるのも確かだろう。或いはそれはもう実現しているのではないか、とはつまり、実は初めから計算などした事はなく、ずっとただ、あらゆる事のただ締め括られるだけの有り様を眺めて来たのではなかったかと言う事だ。一体、計算出来ない事の計算とは何だろう。しかしその前に、何故それしか出来る事がなくそれをし続けて来たなどと言う考えが、さも正確で生々しい記憶であるかのように頭に浮かんでしまうか。計算されなければならないような事と何の係わりもなしに生きて来てしまった事に、がっかりでもしているせいか。今更どうであろうと構わない。隅々まで計算で成り立っている世界が仮にあったとして、そこに身を置くしかなかったにしても、それもまた唯そのように締め括られ、それをぼんやり眺めていれば、それに付け加わる何事もない。と、考えを締め括ればそれで済むではないか、と思ってしまうのも、計算出来ない事の計算にめ

違いないが、それでどうと言う事もないなら、それで済む筈だが、どうか。いや済む筈の事などない。あっても、どれがそうかを見分けられる筈はないなら、ないも同じ。事は事であって、それをどのようにか扱い直してみても、何を遣っているか分からないようなもので、済ませて済む事などありようもない。などと決め付けるのも、輪を掛けて何を遣っているか分からないようなもので、何の事とも何一つ係われていないに違いないと諦めておけば、そうは間違えずに居られるのではないか。しかしそうばかりもして居られない。計算出来ない事の計算が要らなくなったのは、計算出来ない事が、そのままに決まりが着いて、計算出来ない事だけがあって、そうなれば何一つそれと係わりようもないどころか、他はどれも要らない事であるしかないなら、のんびり諦めて居られる筈もない。自らを要らない事から救い出すためには、今こそ計算が要り用で、それもただ計算出来ない事の計算を続けるだけで済むかは、相当疑問で、では何をどのように計算すれば良いかと言うと、何も思い当たらない辺りは、いかにも計算出来ない事の計算であり、またその要らなくなった事の証しのようでさえある。もう決まりは着いているのだから、そんな証しは要らないが。そうして計算出来ない事だけがある。いや、計算出来ない事しかないなら、どうしてそれを計算出来ないと言えよう。それをそう言える計算が必ずまた何処かでされていて、（二〇二二年五月五日）

（災いが騒がしさに…）

災いが騒がしさに充ちていても、何においても騒がしさに勝る静けさであれば、静けさに勝る災いはない。しかしその災いを被るのは何。騒がしさによる災いなら見当が付くが。或いは、見当も付かないのが災いし、静けさが、その災いを撒き散らした跡をすっかり消せば、それが災いとも知れないで、何処までも拡がって取り返しが付かない。気付いても、それに立ち向かう騒がしさに勝ち目がなければ何にもならない。そうして遂に、薄々そうなるだろうと思われていた通り、静けさが騒がしさを、二度と戻れない所まで突き抜ける。刺し貫かれた騒がしさは、煙のように跡形なく、静けさばかりどころか、騒がしさなしには、もう静けさでもない。静けささえない程の静けさ。そんな事もあり得るか。しかし兎も角それは、どうにも厄介であるのは確かで、どう取り除けるか、しかしそれを考えるのがそれであっては。けりは付いている。それも騒がしさが消えてでなく、初めから。その静けさの齎す災いばかりに、一切が先導されて来た。しかしそれなら、一切は災いに負っている訳で、どうしてそれが災いか。勿論一切が災いなら災いだろうが、そうとも決め付けようはないし、

一切を災いと決め付けても同じ事。災いばかりでは何が災いか知れないだけ。いや抑も、何が災いか全く知れていない。騒がしさを災いが溢れようと、それを上回る静けさがどんな災いとなろうと、災いが何か知れないで、一体何を見ていたか。何も見える筈がないなら、見える筈のないそこに何を見ようとしたか。恐らくは、静けさと騒がしさが二つで一つであるままの、その隅から隅までを見たいに違いない。元々二つは別のものだし、一つと言っても、重なったり触れ合ったりもしない。それでもその二つ揃ってだけ、そこに色や形や匂いや肌触りがあった。静けさが先導したとは言え、先導される騒がしさがなければ先導も出来ない。それはしかし、静けさが騒がしさを突き抜けた、その先から振り返って見える景色で、二つ揃っていた時には、ただ色形などが行き交う、分かちようのない一つの景色があっただけで、そこに静けさと騒がしさの二つがなければならなかったなど、考えを巡らす必要もなかった。それが必要になってしまうのは偏に、騒がしさが消えても残ってしまう静けさが、どうにも厄介だから。道は二つ。騒がしさが静けさの周りに取り戻されるか、静けさが静けささえ刺し貫いて、消えた騒がしさの後を追うか。尤も、どちらの道も開かれそうにないからの厄介で、それならまた別の事を待つしかない。方法を求めては、幾らあざとい手を使おうと、あっさり静けさに見破られるのは知れている。静けさだけなのだから。しかし待つしかないのも、紛れもなく方法だろう。

しかも静けさだけしかないと分かった上での方法であれば、中中にあざとくもある。ただそれを静けさが見破っていない筈はない。だからどうなのか。見破られたから駄目か、見破られて構わないか。分かる筈がない。待つしかないのを已めると言う手はある。その手がどうなのか、分からないだけだが。いや、そうとも限らない。待つしかないのは、静けさしかないから、言い換えれば、静けさだけでけりが付いていたのが、どうにも厄介だからだが、では静けさとは何か、災いと同じで、それについて何を知れているか、全く知れていないのではないか。或いは実際には、どう仕様もなく知れているのかも知れないが、少なくとも知れていない振りは出来る。静けさから見れば、呆れる程に拙い方法に違いない。目を開けて周りを観察しながら、荒い息遣いで、死んだ振りをするようなもの。しかし余りの拙さに死んだ振りをしているとは伝わらないで、何かまた別の取り違えが導かれるかも知れない。そんな見通しこそ、拙さに輪を掛けて拙い思い込みだが、そうともなれば、それは静けさを食み出し、うっかり騒がしさとも繋がってしまうようなら、そんなものに静けさが一々構うとは思えず、そう思えないのを、（二〇一二年五月九日）

（諦めた仕事は…）

　諦めた仕事は一つもない。中途で投げ出したものは数え切れずあるが、どれ一つ諦めてはいない。その投げ出されたままに、それらは時を止めたようにそこに残り、これ見よがしに痛痛しくも確かに息を継いでいて、そのようにしていられるだけの形に、何の欠ける所もなく完成をみている。諦めた仕事があるとすれば、それはすっかり出来上がって済まされた仕事の方で、どれもその出来具合いを確かめようもないままに、うっかり、或いはすんなり、或いは渋々と、手を放れて行った。それらはどんな仕事だったろう、すっかり忘れている。取るに足らない仕事だったに違いない。勿論、余りに多くの困難を抱え過ぎ、どう頑張っても取るに足らない成果しか上がらずに、それでも仕事をし終えたにはし終えて、手を放れて行ったと言う事もあったろう。必ずしも、それをし遂げて取るに足らない仕事ばかりとは限らなかった。しかしそれでは、諦めてはいないまま投げ出すのと、何がどう違うのか。あっという間に仕上がった仕事にしても、その容易さだけで、それを取るに足らないとするのは早い。その困難さに一切気付かず、まるで仕事になっていない、ほんの上っ面を撫でただけかも知れない。その実際どうであるかについては、中途どころか、その仕事を済ませた手際良さに惑わされて、殆ど初めから投げ出され、それでその仕事を取るに足らないと決め付けているに過ぎない。どれも、そのすっかり出来上

がったかのように中途なまま、それらは何処かでまだ息付いているしかなく、ただ済んだ事として忘れられたに過ぎない。或いは思い出すに足らない事にされたに過ぎない。それらは決して、そのようであるまま、決して諦められてはおらず、その諦められない形で完成している。であるなら、仕事を諦めるには何をしなければならないか。迂闊にも、その仕方を分からないまま仕事を熟して来たのか。それでは、諦められていない仕事が、そのように完成したまま、溜まりに溜まって積み上がるばかり。仕事ばかりではない。一度でも目に触れたもの手に触れたもの耳を掠めたもの嗅いだもの味わったものその他全て、その中途で投げ出されたまま、諦められない形に完成して、幸いにも何処かに紛れているようではあるが、それらはどれもまだ、何処かで息をしているに違いなく、何かの弾みに、それらが一斉に目の前に姿を現せば、こちらは押し潰されて一溜まりもないだろう。しかしそんな事も起こっていないのなら、やはりどのようにか諦められているのではないか。考えようでは諦める程、容易い事もない。ただ諦めたと自らに言い聞かせれば良い。それでも諦め切れない気持ちなど時の過ぎるに委ねてしまえ。確かにそれで事もなく過ぎて行くようでもある。しかし、自らに言い聞かせ、諦めた事にしてしまうのは何故かと言えば、それは必要に駆られるからで、つまりは、仕事に費やせる時は限られ、刻一刻と削り取られていて、中途で投げ出されたまま諦めの付かないものなどを一々

気に病んでいたら、愈愈時は奪われる。成る程そうかも知れないが、ではそうして捻り出した時を使って何をするか、気が付けばまた、諦めていない中途のままの仕事やら何やらで、時は埋まるだけではないか。そんな事のために、済んだ事は諦めたと自らに言い聞かせているなら、一体何をしているやら。ではどうするか、と言っても、何もない。抑も、ではどうするか、と言わなければならないか。どうもせず、ただ何一つ諦めず、そうして居るだけの事。唯一つ遣りようがあるとすれば、限られた時から解き放たれる事か。尽きない時が手に入るなら、仕事も何も全て諦めたままでも、それで何一つ失われはしない。が、削り取られるばかりの直に尽きてしまう時に身を委ねていては、諦めようにも諦めさせて貰えない。多分、諦めるための時は、他の何をするための時よりも長く掛かって度外れて足らないからで、時が限られる程、投げ出されたものの中途さには磨きが掛かり、諦めようなく完成された形の確かさは弥増し、

（二〇一二年五月十七日）

（後を追っていても…）

後を追っていても、追っている内に追い越してしまっている。追うも追われ

るも、その何かは分かっている積もりでも、その姿のまるではっきりしていなければ、所々で棒を立て、引き返す事にでもなれば目印にしようとしていた筈が、そんな棒を何処から持って来られるか、今更ながら疑う始末とは。或いは棒など要らず、目印なら地面を引っ掻けば良いが、引っ掻くに適した地面などあったにしても僅かで、大抵は堅過ぎるか柔らか過ぎて、やっと良さそうな地面を見付けて綺麗な引っ掻き傷を付けられても、多分綺麗過ぎるのが災いし、僅かの歪みで見失われる。それなら地面でなく、一度傷付ければ中中消えない所を引っ掻いて来たか。そんな都合良い所は一度も通った覚えがない。引っ掻いていた気になっていただけ。或いは、引っ掻く事さえ思い付かず、ただ姿を明かさないものを追ってさえいれば、それで何かの目印を残せている気になっていたとも。どうしてか。それらしい答えは出ないが、恐らくは、この追う身と、その追うものとの距離を絶えず測っていて、その微妙に動く刻々の移り変わりを、一本の途切れない震える線にして頭に精確に刻み、それを揺るぎない記憶に留めていられたから、或いは少なくともそう思い込めていられたから、に違いない。その線を逆に辿れば、幾らでも戻れると。それが、綺麗さっぱり失われたとしたら。したら、ではなく、それはその通りに違いない、追うものを追い越してしまったのだから。線は途切れるしかなく、それまでの線をどれ程正確に辿れても、用をなさない。起点が失われていては、絵の中の好みの線

を、一歩下がってぼんやり眺めると同じ。ただそんな線も見当たらない。ただそれで、戻る用意から解き放たれたとは言える。いや、追い越してばかりいたなら、用意など少しも出来ていない。線が見当たらないのも当たり前、そんな線など引きようもなければ。しかしそれでどうと言う事はない。何故なら、追い越してしまった所から戻ろうにも、その追い越したものの方へしか戻れないなら、それは戻っているのではなく、ただ身を翻して、ずっと追っているものを、また追っているだけ。もう戻りようはない。何処へ戻っている積もりでも、追い越したものを、追い直してしまうしかない。確かにそれはそうだろうが、ひっくり返して考えれば、そのように何処へ向かって追っていても、その追う道筋は全て、戻ろうとする向きと重なる。つまり初めに追い越してしまったまでは、ただ追うだけだったが、それからは、追うと戻るは一つの動きの中の一つの事。であれば、その追い越してしまったもの、勿論それは追い続けているものだが、それが、戻るための目印でもあるしかない。そうであるなら、ただ追っているだけで目印を付けている気になっていたばかりでなく、実際にそうしていた事になる。それなら、ただ戻るための目印だけをずっと追い続けて来て、それを追い越してばかりで少しも戻れていないだけ。それならそれを、戻るための目印と思い込んでいるだけで、寧ろそれは、何処にも戻らせないための、ただ徒労を齎すだけの印ではなかったか。さてそうと分かってどうしよう。

いや、そうと分かるからには、もうどうにかなってしまっていて、それでもう、追うも追い越すも戻るもなくなっていないか。成る程、何処にも傷は負っていなさそうで、体は行きたい方へ行けそうだが、そうして何処へ向かったところで、それは何処へも向かっていないと同じ。それが追うでも追い越すでも戻るでもないなら。或いはそれで初めてそちらへ行ける。そちらとは勿論、追うものを追い越したりしない方。そうしてやっと追い付いた所は、ひょっとして初めから一歩も動いていない所のようでありながら、動き回れる所は全て踏み尽くした果てにしか辿り着けない所のようでもあり、その中間の目立たない何処かのようでもある。それは、それまでの徒労がどう感じられるかで、変わるようで、（二〇二二年五月十九日）

（目の前に見当たらない…）

　目の前に見当たらない、その何についてであれ、幾らでも詳しく尋ねられる。何にも妨げられない。目の前に見当たらないものなら数限りない。その一々が手当たり次第に問い質され、終わりがないなら、目の前は尋問ばかりが果てなく溢れ、溢れ続け、溢れる先さえ見当たらなくなれば、それについてもまた、

詳しさを窮めても窮めても更に詳しく問われ続ける。暗い一点へと突き詰められるようであり、同時にまた、一点の暗さを無限に突き合わせて暗い、無限のその先へと突き抜けるようでもあって、余りに詳し過ぎて、その何が尋ねられているか、さっぱり見当も付かない。そうなってもまだ、尋問には果てがなく、その詳しさに勝るその先の詳しさの残されているのだけは、刻々痛みが増して行くように分かってしまう。しかし流石にそこまで来ると、それは果たして目の前に見当たらないものか。寧ろそれだけが目の前にあって、他の一切を目の前から遠ざけ、見えなくしているのでは。しかしそうではあっても、こちらにそう思わせてしまうものが何か、或いは何かとも言えずにあって、それはどう見ても何処にも見当たらないなら、それについてだけは、何処までも詳しく尋ねられて行くしかなく、果てのなさへと、また突き抜けるように。しかしそうなればもう、見当たらないものは、それ一つで、他には見当たらないものさえ見当たらない。その詳しさが突き詰められて行く程、それは暗くも明るくもない、何処か一点へとそっと静かに収まって行くようで。しかしそのようであるだけで、そのままに消えそうにはなく、問われ続けるには変わりない。しかしこれらは、目の前に見当たらないものの事であって、目の前に見えているものと何の係わりもない筈。とは言えても、では目の前に何が見えているか、とそちらへ目を向けても、目の前に見当たらないものよりも、もっと見当たらない。

そちらへ目を向けられているかも分からない。目の前には、見当たらないものしか、見当たらなかったのではないか。そんな目の前なら、その目の前が見当たらないようでもある。そのせいで、見当たらないものの問いという問いの果ての、窮まりない詳しさが求められてしまうのではないか。そうに違いなくても、と言うか、そうに違いなければ、目の前に見当たらないものばかりに、見当たっていた訳で、何故その見当たるものが見当たらないと見えてしまうのか、果たしてそんな目の前を目の前にしているのか。しかし疑いに捕らわれてばかりでも仕方ない。見当たるのが見当たらないものばかりであるなら、それらについて詳しく問い質して行くしかない。いや、しかない、と言ってはみても、見当たらないものばかりを、どう用いて問い質せるのか。問うしかないのに、問いようはない。或いは、だからこそ、窮めても窮めても限りない問いを已められない事で、その埋め合わせをしていただけかも知れない。何も問えない事と、何もかもを限りなく問い続ける事は、何程か違いを数えられるにしろ、何時かは同じ所に行き着いてしまうなら、ここはその行き着いた所に違いない。すると目の前に、問い窮めなければならない事柄が、限りなく溢れ出て、その溢れ返るのを目の当たりにするしかなく、しかもその勢いに付いて行けず、何一つ問う事は出来ない。しかしその勢いのままに、数限りなく問われてはいて、ただそれが問われるものにまで届かずに、問うた方へ引き戻され、数限りない

問いが行き場をなくして溢れ返りばかりになれば、その問いばかりの犇めきに目の前は塞がれ、問い窮めなければならない事柄とは、すっかり切り離され、そうなれば問いはどれも問いでなく、ただ目の前を塞ぐだけの、何ものでもないものになるばかりだろうが、案外その、どうにもならないものが、すっきりした問いと答えであるかも知れない。いや、そんな気安めが通るなら話しは疾っくに終わっている。問いは常に答えを嫌い、窮めようのない方へ逃れて行く。或いは問いとは、嫌われ見棄てられた答えの事かも知れない。見棄てられた答えが自らに答えを求めても、自らに見棄てられた自らを見出すだけで、それを「何故だ」と問うのであれば、（二〇一二年五月二十六日）

（行き着く先は…）

行き着く先は直ぐそこだが、行き着けばどうなる。行き着くしかないが、何のため。答えは出なくても、大体の当たりは付け、それを後ろに伝えるよう求められている。しかし後ろには何が、などと気迷うべきでない。後ろの見付かる筈もないのは知れている。そこでさて当たりだが当たりと言うなら、それが強いか弱いか、どちら向きか、が取り敢えずは大体の事。しかしどうやら、そ

の行き着く先が直ぐそこに見える所までは来て、そのまま長居し過ぎたらしく、強いも弱いも何がどちら向きかも、それを見て取る術を失ってしまっている。いや、長居どころか、まだ何処かに居られてもいないのでは。そこに居られるようでも、そこが見せ掛けでは、そこに居るのも見せ掛けで。そこに居るそこが、居られる所ではない。それなら、そこに居るも居ないもないが、何故そうなる。行き着くための時がないから。それは居るための時をも奪う。当たりを見て取る術をも奪う。時がなければ、何もかも。しかし、ただこうしている時は、果てもなく続いて行きそうで、その時を使って、なくなった時を、その小さ故に美しい小箱のように、それを転がすように、眺めていられる。小箱は一つではない。一つかも知れないが刻々姿を変え、その様が並べられ重ねられ、織り上げられ、分厚い絨毯のよう。そこに乗れたら、そこに居られる。などと少しでも考えてしまったらしい。絨毯である筈がない。乗れる筈がない。絨毯の見掛けは呆気なく崩れ、初めの小箱一つに戻れば、それは小箱とは似ても似つかず。或いはまさかそれは、小箱を外から眺めるのでなく、小箱の中に閉ざされ、その内側を眺め回しているからでは。しかし、なくなった時の内とは。何一つそこに映るものなどなさそう。それが幸いしてか、何も映らなければ、内面は果てなく拡がって行く。ただそれで、決して内面の果てに行き着けないなら、却って災い。その災いの果てでもあるように、呆気なく小箱が見付かれ

ば、そこは内ではない。いや、箱を外から眺めながら、そこがどうして箱の内でないか。なくなった時の小箱であれば、その内と外は一繋がり、切り分けられもしない。それなら小箱と見えているだけ、小箱である筈もない。ではその小箱の見掛けは何。と問えば、その問うものが小箱の見掛けで。そうして小箱は、まだ誰にも触れられていない静かな森の迫る、真っ直ぐな岸辺に打ち寄せられ、後ろから来て已まない波の音が、そこが、と言うか、そこに転がる小箱が、この行き着く先であると知らせて来る。しかし何より当の小箱が、そんな事はあるまいと頑な。その頑なが、小箱に小箱を見失わせる。そうして波だけが打ち寄せて済むなら、小箱など、見掛けだけで、要らなかったに違いないが、それがそうも済まない。小箱が見失われれば、波はがらりと姿を変え、どちらから寄せて来るか、見当も付かない。しかしその、波の定まり難さ。それが、時の定まり難さに静かに溶けて重なれば、波はそのまま時であり、際限なく波となって打ち寄せ、自ずと再び小箱を洗い出し、それが波に揉まれ、なくなった時の姿は、角を磨り減らした小箱を経て、すっかり玉、くすんで透けた。小箱より一回り小さな、更に少しずつ磨り減り続ける様に、波はどれも岸辺を逸れ、その玉へ向かう。寄せ続ける時が、ひたすらその玉を向くなら、そこに、行き着く先の見出されているのも明らか。試みに後ろを振り返れば、何処も彼処も後ろで、どの後ろからも際限なく時が押し寄せて。しかしそれらはどれも、

なくなった時を向いてだけの時、つまりは、なくなった時へと限りなく近付いて行くばかりのものであるなら、湧き起こりながらも、そのままに、なくなった時に従って、なくなる前からもう、なくなってもいる。しかし、であるのでそれは、行き着くべき先へと滞りなく行き着けてもいるに違いなく、なくなった時は、内も外も一繋がりの小さな玉の揺らめきを眺めるように、それを、（二〇一二年五月二十七日）

（見直す度に…）

見直す度に小さくなっている。が、そう見えているだけでしかないとも、はっきり見て取れている。遠ざかっているのでなく、それがそれを、徐々に小さく見せる。そうする術を、それは身に付けている。或いは、こちらが目を逸らすか瞬きする度に、同じ形の、より小さなものと入れ替えられているかも知れない。しかし、それを同じ形と、どうして確かめられよう。実は大きさは大して変わらないのに、前より少しだけ小さく見える、そんな形のものに入れ替わっているのかも知れない。それはすっかり違う形なのに、前より少しだけ小さく見える事にばかり目を奪われてしまえば、形の違いなど見て取れない。いや、

それは全くそのままで、遠ざかりもせず、それを見るこちらの時の速さが刻々変わって、それを小さく見せてしまうのではないか。どうやらそうであるらしいのに耐えられないかのように、それは、小さくなる速さを増し、二、三度見直しただけで、小さくなり過ぎて、すっかり見えなくなってしまった。そのままにはして措けない。その在る所を見失う訳には行かない。その周りを四角く切って、そこに窓を作り、窓越しにそこが必ず見えるようにした。しかし窓から何が見える。見直しても見直しても、窓の四角い縁ばかり。その縁をぐるりと目でなぞる。その縁の、どうしようもない薄っぺらさに、どうしようもなく笑ってしまうと、その笑いが窓の景色の奥深くまで振り撒かれ、その小さ過ぎるそれの、確かにその姿である一点を、淡い紫に染め、震わせていないか。するともう窓を抜け、その土地へ踏み込んでいて、そこは念願の土地に違いなかったが、その土地を夢見た事など一度もない。ないからこそ、そこは、夢に出てくるような在り来たりな土地と異なる、何処にあるかも知れない、中中行き着けない所。思い掛けず、もうそこに来てしまっている。振り返ると、窓は伸し掛かるように広く、その桟は太く頑丈そうだが、中にはどんな色も形も浮かび上がらず、色と形を失って、もう二度とそれを取り返せないものの、流し込まれて行き着く先のよう。しかしそこが何も映さない鏡のようになって、色と言う色、形と言う形を撥ね返し、却ってこの土地を、あらゆる形の犇めき合う、

極彩色の鏤められる所にしているのも確か。そしてどの色も形も、それぞれにしかない時を持っていて、その数限りない時が、それぞれに向いている方へと延びて行く。その向く先の全てへ一気に目を遣ると、数限りない筈の時は、呆気なく幾つかに束ねられ、更にそれぞれに弧を描いて遠ざかり、その見える見えないの境を試すかのように、その見えなくなる一瞬までで引き返し、真っ直ぐな光る筋の中を通って、どれも直ぐそこに、小さな欠片になって転がり、拾われるのを待つ。つまり、それらを拾える何かが、その傍らに必ずある筈、とそう信じているらしい。確かに、欠片であるなら、何時か拾われる事もある。しかし何がそこへ近付けるだろう。束ねられた数限りない時が小さな欠片になって転がる所があるなら、そこは、何処からも懸け離れているに違いない。或いはその懸け離れていて、それで、そこへ直ぐ手が届く事もありそうで。であるなら、あらゆるものが、それらを今にも拾い上げよう、いや、欠片はもう疾っくに、拾われ尽くしている。そうして、持ち去られてしまっている。それを持ち去ったのがあらゆるものであっては、探しようもないし、探すまでもない。それらは何処にでも見付かるしかない。しかしそんな事に耐えられるものばかりではない。そこを出て行こうとするものが後を絶たないが、どれもあっという間に燃え尽きて終わり。何処にでもそれらが見付かるそこから、どう逃れられようか。ただその問いだけは、風に靡いて、何処へか飛び去って行けそうで

はないか。その何処かでは、同じ形が何度も何度も見直され、時を腐らせ、朽ち果てさせ、そうなればそれとそれが同じ形かどうかも比べようもなく知りようもなく、燃え尽きたもののその燃え滓から押し出されたかに、時の一欠片さえ留まらない、（二〇一二年六月十三日）

（あれとこれとは…）

　あれとこれとは違う。それしかない。そうなら遣り直すしかない。あれとこれを。しかし、あれはこれのあれ、これはあれのこれ。どうにもならない。なら、その違いを、どうにかするしかない。しかし、あれがこれでなく、これがあれでない、と言うただそれだけの違いなら、あれがあれでありこれがこれである限り、どうにもならない。では、どう遣り直せるか。遣り直す事など別にないと決め付けてしまおうか。そうしたところで、暫しその違いから目を背けるのが関の山で、そうもしていられなくなれば、やはり遣り直すしかない。であるなら、遣り直すしかない事だけがあって、ただそのために、あれとこれとが違っていたりするだけか。そうなら、違うあれとこれしかないのも尤も。であっても、そのあれとこれを、他に置き換えられるのでもない。先ずは、あれ

とこれ、であるしかないし、その違いによって何処までも、あれとこれであるしかなく、その違いもその違いのまま。そのように、あれとその違いが全てなら、遣り直すとは、それをどのようにか変える事でしかない筈だが、そんな事が出来てしまうなら、遣り直すどころか、どうにも取り返しの付かない、或いは取り返したところでどうしようもない事になってしまっているのは明らか。勿論、何一つ残らず手放した後に来るものを、そのまま受け入れる積もりでもあればまた別だが。つまりは、取り敢えずは、何も遣り直せないまま、遣り直すしかないままに留まるしかない。ただ、そう決め付けたところで、そのようにして居られるかどうかと言うと、居られる筈はない。と言うのは、あれとこれが違わないなら動かずに留まれるかも知れないが、あれとこれの違いは、それを許さないだろうから。幾ら動かずに居ようにも、何かの動き出そうとする始まりを、その違いの前に、或いはその傍らに、或いはその遠く放れた彼方に、見ない訳には済まない。それなら、それだけでもう、遣り直され始めてしまっているようなもので、それなら、その遣り直しの動きに着いて行けば良いか。多分そう。しかしそうなら、ただその見ない訳には済まないに任せるにばかり拘る事もない。つまりは、何でも良い。あれとこれの境に線を引くも良し、あれとこれの間を凍らせてしまうも良し、あれとこれを引っ掴んで捩じ曲げるも良し。どれも、何処からどう見ても、遣り直しに違いないし、ただ見ていて

も、どの途、取り返しの付かない事になるしかないなら、どれを採ろうと構わないし、抑も、どの途、取り返しが付かないなら、取り返しが付かないなど何程でもない。取り返すだけが能ではない、などと嘯いていたところで、それで何事か途が踏み外されるのでもない。で改めて、あれとこれだが、どちらも何処へ行ってしまったのだろう。あれとこれを放っておいて、あれとこれの間にばかり目を奪われ、その火影のようにゆらゆら揺らめく中に、すっかり身を埋めてしまっているような。どうやら、あれとこれの違いに、すっかり身を溶かし込んだらしい。しかしそれは、らしいだけで、実は、あれとこれの違いとは遥かに離れて、違いの分からないあれとこれにぴったり挟まれ、身動き取れないだけではないか。いや身動き取れないどころか、違いから解き放たれたなら、あれとこれとをぴたりと引き連れて、何処へなりと飛んで行けるようでもある。しかし何も得られないまま、ただ飛んで行けているだけでは、身動き取れないと何が違う。そうしてまた、あれとこれとの違いに巻き込まれて行くしかないなら、何を失おうと構わずに、遣り直すしかないが、何処まで遡って遣り直せば良いやら。或いは遡っても、ただ遣り直すのを遣り直す事にしかならないなら、伸るか反るか、いっそ先へ向かって遣り直す方が得策とも思える。常に遣り直しの先取りへ向かって、少しでも遣り直しの匂いを嗅ぎ分けられる方へと、先走って行くべきだ。或いは、そんな匂いなど一々嗅ぎ分けなくても、ただ、

何を失おうと知った事かと、ひたすらに先走り続けてさえいれば、それで、（二〇一二年七月二十九日）

（拾うのを忘れていた…）

　拾うのを忘れていたが、拾ってしまっていたら、それはそこに見付からなかったに違いない。なら、忘れていて良かった。しかし見付からなかったら、もっと良かったのでは。何故なら、それをそこに見付けてしまっては、もうそこへ行くしかないが、とても行けそうにはないので。或いは羽のように軽い一歩で、直ぐにもそこへ行き着けてしまうのかも知れないが、間違ってもそうしてはならない。はっきり分かる。しかし、そうしてしまうしかなさそうで、それで、そうしてはならないとも分かるらしい。ただ、時は未だ残されていて、ではと、拾うのを忘れたせいで、そこに見付けられたそれは何か、先ずは考えてしまうだろう。他に何も出来そうにないなら、他に何が出来るだろうか。それでさて何も考え付かないどころか、他に何も出来そうにないと、どうして言えるか疑う始末。いや、本当にそれを疑えているなら、その疑いは中中に足掛かりになる。そう勇んで、一歩を踏み出してしまったらしい。本当に羽のように

軽くて、どんな一歩だったか知りようもない。疑いは晴れた。出来るのは、その一つだけだった。出来る事がそれで尽きたなら、もう知りようもない一つ。その一つだけが済んで、それで何も残らない筈。筈が、まるで何一つ、残らなかったものなどなさそうではないか。いや、そう見えてしまうなら、そう見えてしまうのだけは、そこから引き離されてしまって、恐らくは、そこには残れていない。しかし、そことは。何処にも、そこなどない。と取り敢えずは答えてみるが、そんな答えがあるか。何も答えになり得ないなら、案外それが、答えにならない答えであるかも知れなくても。ただそれはそれ、そこはそことして、そうしてそこに残れていないものだが、何処へ。その問いの発せられた方へ、とでも。或いは、何であれ何かを問うのが既に出鱈目な事であると分かり切っていて、その出鱈目の方へ。そう考えられたせいか知らないが、あり得ない程に直ぐ近くに、形のない厚みばかりの影のように目障りな塊が見付かる。いや、それは、拾うのを忘れた前か後かは定かでないが、大分前から見付かっていて、見付かったのさえ忘れた事にしていたが、そんな誤魔化しの通じなくなっただけ。塊と言っても、微かな風にも転がりそうな埃を固めただけのような、実は塊とはまるで別のものかも知れないような。それは目障りなまま、水の流れるのが当たり前のように幾つかにばらけ、横に並んで綺麗に同じ方を向き、その内の真ん中にはない一つだけが、捩れて、ほんのりと赤味さえ滲ませ

たかに、そっと別の方を向く。その別の方へ行ったのだ。何かは知れないが。或いは、その向く方だけが、その何かかも知れない。それは救いなのか、終わりなのか、その先へ何かは延びて行くのか、そこで断たれるのか。そんな事を気に病むまでもなく、ただそちらを向くものだけが、兎に角は何かであるしかない。しかしそれは受け入れ難い。何故なら、真ん中にない一つから始まったから。何故それは真ん中になかったか。真ん中にさえあれば全て巧く行くだろうに。そうでないばかりに、どれ程の災難が降り懸かるか。いやもう疾っくに降り懸かるだけ降り懸かった後だ。しかし何故、真ん中とそうでないとが、そんな違いを引き起こすのか。この解けない問いを抱えて、どうしてそちらを向いていられよう。などと、踏ん張ったかどうかは知れない。それもきっと羽のように軽かったかで。それで折角のその向きは呆気なく見失われたが、悔いはない。さて、腹が空いたのでなければ、それらしい何かが空いて、その空いた方を向くと、何であれ、決して空いたりしないと分かる。それが目障りな塊の正体、と言うより、それはやはり、塊としてある別な、間違っても幾つかにばらけたりしない、埃を固めただけのようではあっても、ふわふわと微かな風に転がれば転がる程、周りの埃を取り集めて膨らむどころか、少しずつ透き通って、中が空つぽになって小さくなつて、その小さくなるのを僅かに自らを照らして喜んでいるような、そんなもの。その空っぽな内へ向かう光りの方へ、行

ったのなら行ったのだ、その何かも知れないそれは。ただ勿論そのそれは、　拾うのを忘れて見付かったそれとは、まるで別の、（二〇一二年八月十八日）

（数えられたものを…）

　数えられたものを、数えられなくなると、それを夢と決め付けるのは、何故だったろう。それなのに東と西は、びくとも動かない真っ直ぐな一本の線が、そこに直ぐ目の前を掠めて真横に引かれ、その何処までも離れて行く二つの彼方に、掻き消しようもなく見分けられる。夢に東の覚えも西の覚えもなかった筈。それとも東と西を態態見分けるまでもなく、夢は常に東と西に挟まれていたとも。しかし夢などはどれも、夢と決め付けられたものでしかなければ、拘るだけ無駄骨では。しかし、数えられたものを数えられなくなって、それを夢と決め付けないなら、替わりは何。東と西を精確に示す一本の線だけでは、まだ何とも向き合えていない。東と西が、何を数えられようと数えられまいと、そのままであるしかないのであれば。ただ如何にも妙で、数の外に東と西だけがくっきりと示されるとは。しかし東にしろ西にしろ、そう決め付けられたものでしかなく、やはり拘るだけ無駄骨。いや、東と西は夢とは違う。その違い

は確かではないが、違うかも知れないには違いない。勿論その違いの分かる筈もないのは、抑も夢が分からないので。そうなら分からなくて何の障りもないが、障りがなくても、その分からないのを、掻き消しようがないのだけは、掻き消しようがない。或いは掻き消しようを見付けられずに、掻き消そうともしたくないだけか。そうして結局、替わりが見付からなければ、初めの、何故だったろう、だけが残りそうだが、考えてみれば、それも尤も。何故なら、数えられたものを数えられなくなって、どうやって、その何故だったろうへと、切り込めよう。そうに違いなければ、そこに東と西が、びくともせずに示されるなら、それは天佑。或いは東や西は些末な事で、ただ数の外にそれがあり得るという事が示され、その天佑とだけ、揺るぎなく向き合えている。ただそうであったとして、それだけでは、それより何も起こらないのも確か。何も起こらなくて良いから何も起こらないなら、それで良い。ただ残念ながら、と言って良いかどうか迷うところだが、何も起こらないなら、何も起こらない事の起こっているのは疑いようはなく、その起こっている事が、数の外にそれだけであるそれと、どう係わり、更に何を引き起こすか、見極めようとせずには済みそうにない。或いは、その済みそうにないが、引き起こされる全てであるようでもあり、少なくとも当面はそうであるらしいなら、見極められるものが見極められるしかないが、見極められるのは、そこに何も起こらない事だけ。その寄

る辺なさが振り返らせるのは、紛れもなく、数えられるものを数えた数の方であって、それは遠い彼方どころか、振り返りさえするまでもない直ぐ側にあって、もう馴れ馴れしく擦り寄って来ているではないか。そうだ、数えられなくなる、などと言うのは、ただ道に迷ったか、軽い眩暈のせぃの混乱でしかない。数えられたものを数えられなくなるなど、あり得ない。しかしそれが確かであるようである程、その数えた数が、どれも怪しくなるばかり。数えられた数など、ものの数に入らない。それを数えられなくなって初めて、それは数の外に数えられる。東西を突き抜ける一本の線は、その始めに数えられるものであるしかないではないか。その数えられたそれは、数の外にあるままなので、数では表せない。つまり、数で表されるものは、であるのでこそ、数えられてはいなかった。確かに、そう考えておけば辻褄が合うようだが、合ったから、それが正しいのでも何がどうでもない。数えられると数えられないとは、反対の事でも似た事でも交わる事でも隣り合う事でもなく、全く並べようもない、それぞれの事であるようでしかない。数えられるものは数えられていないが数で表され、数えられないものは、数の外で、数に表されずに数えられている。それが証される所へ踏み出して、そこに東と西を見たのならば見たのだろう。そうであるなら、そこに東と西より更に何かが引き起こされたところで何だろう、恐れる事はない。或いは必ず恐れなければならないとして、（二〇一二年八月

二十七日)

(抜け道だと思っていたが…)

抜け道だと思っていたが、抜け道には違いない、抜け道だと思っていたのだから。しかし、その抜け道と別の道を通り抜けた覚えがなければ、その抜ける先とは。その道だけが通り抜けられる道では、それに答えてくれるものもなさそうで、いや果たしてそうか。何処にも抜けられてなどいなければ。ただ通り抜けている積もりなだけ、逃げている振りと変わらないような。それも、逃げられる筈のない、直ぐ耳元で囁かれ続ける広長舌からの。案外、いや案外どころか他に案じようもない程、それは、自らの声でありそうで、そうでなければ、通り抜けている積もりだけでも、振り切れている積もり位にはなれるだろうに。などと見当を付けているのは、何をしているのか。通り抜けようもない程に、案外、そこで測れる限りの、そこに投げ出された深さを測れているのかも知れない。その身を丸ごと投げ出されでもして。或いは、そんな事で測れる深さなど疾っくに埋まっていて、だからこそ、その深さの影にでも塗れ、抜けようもないのかも知れない。それは、深さを我が身に携えているようでもあるなら、

抜けられないのを嘆くのは見当外れか。ただ、深さの影を身に纏い、それで何の深さとの係わりを持てよう、深さがどれ程の役に立つにしろ。いや、既に埋められようと、深さを外して、その積もりなだけにしても、抜け道は何処からも遣って来ない。で話しは終わるなら後は実行あるのみ。とは言え実行とは、その話しそのままに、それが何かの目的にでも適う何処かへと、身を滑らせて行く事位。身が滑っているかどうかは、隣に何か抵抗として感じられるような、出来れば似たもの同士の同じ歩調を取れそうな誰かの体など欲しいところだが、ありそうにない。となればやはり、測り取れた深さの影が横へ来て欲しいと願うが、ぐるりと身を一回りさせても、その影の綺麗に消え果てているのは、どうやらそれを盗まれたらしく、その盗んだ奴の匂いのする方へ、その匂いの向きを何か抵抗として感じられそうに、追って行けるならそうするしか。そこに抜け道があったのだ、それは白日に晒された、などと早合点出来る筈もないまま、寒気にもならないような寒気だけが、ひっそりと来て、追う身の動きは鈍らされるが、悔やむ事もない。寧ろその動きの鈍る度に、そこに一目盛りが順に刻まれて行くようで、それを確かな足取りとも見える。ただそれで物差しが手に入るようでも、測るべきものがない。いや測るべきものはそうして測られてしまって、その先に測るべきものが見付からないだけか。それが詰まりは、深さを外して抜け道は何処からも遣って来ない、と言う事らしく、きっとそれ

を肝に銘ずべく、ぶつぶつと呟く声は、耳元に囁かれる広長舌と聞き取られるしかないものらしい。しかしそうと分かれば、その声を操らない手はない。と思うのが運の尽きかは知らないが、身は滑るのを已め、滑るのよりもっと危うい中へ転げて行き、声は遥かへ消し飛んで、ぐるりとまた戻って来れば、その一周の中に、確かに深さを覗き込めている。ああ、そこへ落ちれば良いのだ、物差しを手に。しかし遣っているのは、物差しは麗しき一周を引っ掻いて台無しにするばかり、落ちる積もりが足掻く程に抜け道を探すばかり。探すと言っても身振りだけ。或いはその身振りこそ、深さを測るただ一つの途と割り切れば、一回一回の身振りの僅かな違いを論って、そのそれぞれとの繋がりを明らかにするべき。それが出来たならきっと、その繋がりの継ぎ目を無で回し、そのこれはと信じられる継ぎ目を選び、真っ直ぐ目の前に置き、その左右にそっくり同じ重さの世界を配して、その継ぎ目を突っ切れば、それが抜け道に違いない、という思い込みの底を覗き込めば、そこは見る目を追い立てるように見る見る埋まって、どんな身振りで抗おうと逃げ切れそうにない。ただ何がそこを埋まるのだろうという目で見れば、抜けられたかも知れない数え切れない抜け道が、そこに埋まって腐って、更に狭く潰れる様が、また見事な、うっとりするような抜け道であるに違いなく、

（二〇一二年九月七日）

（橋を渡って…）

　橋を渡って何も見えない時、見えていないものは何もない。見えていない中に、ないものはないのだから。ただ見えないだけなのだ、何も見えないのなら。灰色が色の全てを含むように。しかし、橋を渡って何も見えなくなるとは、橋を渡らなかったのではないか。向こう岸が見えての橋なら、向こうに見えていたものが、そちらへ渡って見えなくなる筈はない。では、橋を渡った積もりの何をしたか。それが分かるようなら、何も見えなくなっていない訳で、分からないなら分からないなり、見えないなりに、遣りようを探るとなれば、その見えない時の、見えていないものの何もないのに望みを繋ぐしかなさそうで、さて灰色をじっと見詰め、その中に全ての色を滲ませ躍らせられるような事になるか。しかし全ての色を滲ませ躍らせては、それはまたそれらを灰色に混ぜ合わせているだけで、元が灰色では、それはただ、見えない色の氾濫が灰色に見えているだけだと、独り善がりに耽るようなもの。いや果たしてそうか。灰色と雖も歴とした色であり、そうであるなら、そこに、どの色も及ばない豊かさ鮮やかさを見て取れるに違いない、遣り方さえ飲み込めていれば。ただそうであっても、何も見えない時の見えていないものは何もない、その何

処を探しても、色も、色に見合う別の何も見付からないようでは、どう仕様もないではないか。しかし見えないからと言って、全てを失った訳でもないどころか、失ったものなど一つもないのだ、見えない中に見えていないものもないのであれば。或いは橋を渡り損なったのは、取り返しの付かない失態かも知れないが、渡れなかった橋など、初めからなかったも同じと割り切って、何の障りがあるか。勿論、それは大いにあって、それで如何ともし難い立ち往生を強いられているようでもあるなら、一つその、どちらを向いてでも良い、橋に向かって、出任せにでも呼ばわってみよう。そんな事なら必ず出来るだろうから。するともう橋がそこに架かっているなら、橋を呼ばわろうとした事が橋だったのであり、その橋を渡ろうと、踏み出すべき一歩へ先行きを託し、呼び声を蔑ろにすれば、橋が幻と消えるのも尤も。ただそうにしても、その消えた幻の、幻としてあり得たのも確か。それは時節外れの花の一輪のように、再び顧みてもう何処かに紛れて見付からなくても、その花への動きの何処かに、花は生きて不動だろう。独り善がりに耽るようでも、それが、その灰色の、その色なのだ。と決め付けて、何の障りがあるか。勿論、それも、大いにあり得る。正にそうであるので、花の作り話しなど捻り出すしかない羽目に陥っているのは、障りも障り、何の救いようもない証のようではないか。花は萎らせ、喉は嗄らし、橋も流して、ゆっくり休んでみるのも一計。などと、のんびり構えようと

したくなったのが全く拙かった。花という花は咲き乱れ、声という声は叫び交わり、橋に至っては何処も彼処も橋ばかりとは。橋から橋を渡り歩く他に、どのような生きようもない、などと大袈裟を言い募るのも愚かしいが、その愚かしさに何の障りがあるか。これで三度目なら、もう障りもなさそうで、心置きなく、花と声と橋の錯乱する只中へ戻って、その組み合わせの枠でも楽しむに限る。と思えばもう、そこは、実際そのようにして飽きない面々で溢れ返って窮屈至極、残念ながら空きはなく、弾き出されるしかない、あっという間に。いや、あっという間だったろうか、それは。抑も、あっ、とは、どのような間か。仮に、あっ、だとして、それが、恐ろしく長い気の遠くなる時を見晴るかせた際の形容でないと、どうして言い切れよう。他にどのような生きようもない愚かしさなら、その、あっ、の中に封じ込められるのが相応しかろう。などと決め付けるのも愚かしさの内なら、それは、逃れようもなくそうでしかない。あっに閉ざされた愚かしさに、どちらを向く事も許されず、居ながらにして、濁って湿って、腐る臭いの未だ嗅げないならこちらから求め、などしていれば、何故そう、その一時にばかり拘るのかとも疑われるのは、その一時の、あっ、とも見付からないままのせいかと、（二〇一二年九月十一日）

（その白は…）

その白は、波が岸を、でなく、岸が波を洗う。岸で汚れを落として沖へと引く波。絶えない波に洗われる岸の輝きは見掛けだけ、で、洗うと言えば。顔なら何時も洗っていたが、岸に準えれば、汚れの落ちていたとは限らない。顔の何を洗っていたやら、実はその逆なら、顔が何を洗って、落とされた汚れはどうなった。抑も洗っていたのは何だった。切れ切れに時を見付けては、その時の奥までを顔へ磨き込むように洗ってばかり、それなら時の根っこでも洗い出していたか。尤も今更それが何でも、なるようにしかならない。それより、洗われるのが何か、どうして気に止めずに居られたか。或いは洗うに限らない。叫ぶにしろ引っ掻くにしろ、何処へ何を叫び、何が欲しくて何処を引っ掻く。分からないなら、それも構わない。何につけ、分からない事をしているだけ、そう割り切れないでもない。しかし実は、洗ってはいけなくて、取り返しも付かないとしたら。いや、要は耐えられるかどうか。何も知らずに耐えるべきを耐えていられるなら、取り返すも返さないも、付け加える事もない。或いは常に、ただ耐えられる事をさらりと選り出し、それだけをしていたとも。波も岸もきっと、ずっとそうしているのだ。しかし例えば、選り出しようもないものが、いきなり大きな音で、　お前に耐えられるものではないぞ、　と名乗りを上げ、

直ぐ横に落ちて来て居座ればどうか。耐えられない筈なのに、それでもどうにか耐えられてしまっているようなのは。そこでもう、その直ぐ隣に、狭くても耐えられる所を見付け、その名乗りを上げた大声は、何時か背後に滲んで、こちらは、その声の一歩先を行っているから。しかしそうなら、そうして居られる咎で、時の根っこへの途も自ら閉ざし、それで、何が何を洗うのかも見えなくしているのでは。いや、時は何処へも行かない。洗うのが切れ切れにであれ、時であれば、時の根っこは、もうそこに嫌でも見付かっている。そして、ここにある全てと見えるものを、時の根っこは、銜え込み、捩じ曲がりながら巻き込んでいるに違いない。高く突き上がると見せて奥へ低く、或いはその逆へ向き。それが、その声の一歩先を行く咎なら、今こそ、それに戦いを挑むしかない時だが、その時はもう巻き上げられ、それに巻き込まれるように、時の根っこに絡み付けるなら、そうするのがやっと。そうしてもう、それから目を背けるために、時の根っこに土でも引っ掛けているらしい、耐えられる事を一つ選り出せて楽しいかに。いや土を掻く力はなく、その表面の何かの燃え滓の細かくり砕かれた灰を捏ね回し、そこに僅かに頼りなげな灰の煙を立てているだけ。勿論それも無駄ではない、或いは土を掛けるより効き目がありそう。しかし一体、時の根っこが何なのか。何であろうと、それはそのする事をずっとして今もしているなら、それをここで耐えるも何もない。あの大声の何処へ滲もうが、

その先を行こうが行くまいが、それもやはり、耐える程の何ものでもない。それならもう耐える事に用はない。それとも、そうとは知れない何かを耐えていられて、それで白い波は目に映って来るか。ただそれもまた、全てを巻き取るに余念のない時の根っこが考えさせているのなら、そんな考えは洗い流すに限る。それでまた時の根っこだけが洗い出されようと、もう何でもないのだから。抑もが時の根っこからして怪しい。それは、実在するとしても無用な遠い世界から、波に乗って遥々岸に打ち上げられた朽ち木では。何を見誤っているのか。しかしそう問うなら、見誤りようもないものを先ずは見付けるしかないが、何を見付けようと恐らくは紛い物、或いは紛い物の疑いを晴らせないものばかりでは、波の白さえ、見誤られているだけの紛い物であるのを免れず、そんなものだけで一分の隙なく埋め尽くされた岸辺の眺めなら、それがそれごと洗われる時も直ぐ先のようでもあり、波と岸も、時の根っこなど疾っくに打ち捨て、洗うも洗われるもない、もっと別の事を始めていて、（二〇一二年九月十四日）

（ずっと乾いていなければならない…）

ずっと乾いていなければならない所が、遮られるように湿っていれば、もう

何も芽生えないと知らされたようなもので、それでもその真ん中に、それだけがあるようなら、それは、何かの継ぎ目に違いない、その何かは決して明かされはせずに、辛うじて。その辛うじてが見失われれば、それは継ぎ目でもない。継ぎ目に見せ掛けた、膨らみと裂け目。或いは、継ぎ目の見せ掛けでさえないなら、ただそれだけがそこで形であるらしい、形のざわめき、とでも。それがなければ、そこは未だ何処でもなかった。そのざわめく形の奥に含まれるであろうものが、そこがそこである全てと見るしかなく、それがせめて吹き出そうとする芽の気配でもあれば。しかしそんな気配があったにしろ、風もなしに吹き払われ、次に来るものが求められる。それは恐らく、そこへ届くかどうかが試される、出来る限り控えめな短い声で。そして勿論、どれ程聞き取り難くても、そこへなら声は届く。試されたのは声ではなく、そこへならどんな声も届くかどうか。試されたと言うより、そうと分かっていて確かめられただけで、それによって声は、その聞き取られる所だけは得た。尤も却って喧しい声などは、そこを素通りし遙かに行き過ぎ、そこで聞き取られそうにもないなら、届きはしても聞き取られるには、それなりの工夫も要るらしい。逆に、控えめな短い、声かどうかも定かでない雑音すれすれの声でありさえすれば良いかどうかも、一々試してみなければ分かりようはない。しかし声とは何だったか。そのための喉も失って久しいようでは。仮にでも声であるとしておけば大体当た

っていそうな、声らしきものであるしかない。何処かから声を持って来られるのでもなければ。いや、声であれば、ここへ届く限りの何処からでも持って来られる。声の他に何があるだろう。沈黙は消し去られ、物音など一つもなく、ただ声だけが満ち満ちているではないか。しかしつまりはそれは、ただ開けっぴろげな空っぽな拡がりに取り巻かれているのが確かめられただけなのだが、何故なら開けっぴろげは沈黙を飛ばし、空っぽは物音を悉く押し潰すからで。ただ、空っぽな拡がりには、そこを空っぽな拡がりにしておくための閉じた場所が必ず一箇所はあるに違いなく、そこを塞ぐのが何であるかは、ぐるりと周りを見渡せば嫌でも目に入る。それは初め、時節外れの一輪の白い花が、時節外れの灰色に濁って輝き出す分厚い光りを纏うようだが、光りの僅かな揺らめきが影を刻めば、硬く重そうな鍵の形に変わる。そのそこを塞ぐ扉を開くための鍵。或いはその鍵が、そのままにそこを塞ぐ扉でもあり、自らによって自らを開くのかも知れない。しかしそうであるなら、鍵は自らを開けようとしないのではないか。鍵が鍵であるために。或いは、自らを開ける鍵によって開けられた鍵が、それでも鍵であり続けられるか。ただそうしている間も、鍵はその形を蔓延らせるように空っぽな拡がりの隅々まで伸び、それはもう、そこを丸ごと包み込んで隠す薄い膜のようにもなれば、新しい声は弾かれるばかりでも、その鍵の形の隙間隙間にそれまでの切れ切れの声はじめじめと染み込んで、そ

の一つに混じり合うざわめきは、鍵の形のあちこちに歪みを齎し、そこから奥へ、また別の空っぽな拡がりを垣間見せる。そこにどんな声も届かないのは、見ただけで分かる。開けっぴろげでない拡がりは、どんな声も消してしまうから。或いは拡がりでなく、実は何かの継ぎ目に目を凝らしているだけで、その何かは決して明かされないまま継ぎ目であるしかないなら詮ないが、それでも目を逸らせないのは、それがざわめきさえ拒むからで、であるなら詮なくはあっても、これきり何処へも行かずに済みそうで、何も芽生えなくても最早何でもない。それがきっと、鍵を開けた鍵が鍵のまま投げ出された鍵の鍵だろう、と当たりを付ければ、拒まれたざわめきもまた、拒まれたままそこへ投げ出され、その形を鍵に似せたいか継ぎ目に沿わせようと、（二〇一二年九月二十六日）

（南南西を向く…）

　南南西を向く午後の草原の東隣に、何時の間にか、深い森が聳えて斜めに走る。まだ十分に陽はあっても、その一条さえ森の上へは差さないし、照り映える草原の、照り返しすら森へ届かない。見上げても見付からない程に高く分厚

い黒雲が湧き立つなら、それが陽を森の方へだけ遮っているに違いない。しかしそんな森も、まだ大分先ではあるが、いきなり途絶えてしまうのもはっきりと見え、その先に平たい草原が真っ白に回り込んで、森の行く手を厳しく拒む。森の好きにさせるものかと、森を走らせてしまった過ちを二度と繰り返したくないかのように。しかし見えた通りだけの森でもない。森は途絶えない。森が、走り続けるのを阻まれるなどありそうにない。この南南西の景色は、草原が、その夢を絵にして眺めているだけのもの。或いはその絵がずれて傾いて、その隙間に森の侵入を許してしまったなら、絵に入った罅。「夢がどうしたなんて言い出す奴が夢だ。」「だったら、そう言うお前も同じだな。」「それはそうだが、その話しには乗らない。」「乗ってるさ。初めからその話しなのに、難癖付けて何になる。」「何かにはなるだろう。」「それならもう、なっている。その話しをするその話しに。森をその中へしっかり閉じ込めて。」勿論、草原もその夢の絵もその罅も、そんな話しに耳は貸さない。その話しに耳を貸したのは、恐らくその話しだけだろう。森は隙を突いて、草原の脇どころか、草原を真っ二つに引き裂いて、何時また走り込んで来ないとも限らない。それは草原と森だけの事ではない。そして実は、南南西へ向かれた初めから、森が何処を何処まで行こうと決して行き着けない、遠い山脈の向こうの崖の底を走る深い罅が、そこから掘り出されて、草原の草の生え始めるずっと手前へ嵌め込まれる事であ

ったのかも知れない。それなら、草原も森も丸ごと、その話しの何処かに嵌め込まれていた切れ端に過ぎず、何処へ移されようと走り続け、地底の岩盤へ行き当たって鋭い音を山脈へ谺させて已まない罅を止めるには、艶めかしく拗る川の流れを、隠れなく横たわらせるしかない。山を下った尽きない水を見せ付けるように。それで例えば森ならば、海のない景色であっても、行き場をなくした小さな島にだけ残されるだろうか。草原なら、一個の草の実の中に閉ざされるだろうか。そうであっても、そうである前に、どちらもすっかり忘れられ、夢の話しの虚ろな奥へ溶けてしまっているしかない。しかしその溶けて消えた中にしか見出されはしない南南西であったようでもあれば、草原と森の並び走る姿が、夢の話しを呼び入れたのかも知れないし、そうであればその地を占めるのは、ただその話しの中の夢だけに違いなく、その耳に響くのは、さり気なくも、ただ山の水の音では。しかしそのように聞き取られるしかない音であれば、それは、川の拗りに押し出されるようにでも、夢の外へずれて行くしかない。「だから、そんな事を言ってる奴が夢なんだ。」「お前もな。」「乗ってやるよ、その話し。」「乗ってどうなるものでもない。」「今度はそっちが難癖か。」「何かにはなるだろう。」「もうなっている。何にとそれを言うも言わないも。」勿論、そんな話しは、水の音より速く水の外へとずれて落ちて行く。その水の外が却って、水の縁をうるうると盛り立て、その裏側へ崖が聳えれば、その底の

罅の虚ろな奥を、その話しは走って行く。何と言われもしない何かから逃げ続けるしかないように。それが遠回りに遠回りを重ねた果てに、その地を取り囲んで切り取っていれば、それはやはり南南西を向く午後の景色であり、そこに何が放り込まれるか、何が放り込まれようと夢の絵の話しにしかならないようなら、何時まで経っても何も放り込まれそうにないと諦めながらも、そのただ待つのに、飽きはしない。その飽きはしない分だけ、限りある夢の時を速く進めてしまうにしても。いや、時はもう森に呑まれていて、それが恐らく森を走らせて已まず、（二〇一一年十月十三日）

（天に向かって逆さに…）

　天に向かって逆さに根を拡げるように、気の済むまで枝を張り尽くしたかの一本の木の下の、静かなそこへは差し当たって用はなかったが、音のする石ころが幾つも転がっているのを見付けて、引き返す用もなくなった。石はどれも決まった向きに見てだけ真ん丸で、全ての石が真ん丸く見えるのは、どうやら際疾く微かに一カ所しかない。それなら石は、善く善く精確に置かれたか。多分そうでもない。何故なら石はどれも、揺れる地面のせいか風のせいか知らな

いが、少しもじっとしていられない。精確さは偏に、それでも全ての石が真ん丸に見えるその一カ所を見失わずに動き続ける側に懸かっている。ただそれは、そう難しくもない。石の散らばる大体真ん中に居て、その動きに導かれるままに、ふらふらと彷徨うだけ。それでもうどの石も真ん丸で、ふらふらも心地良い。が、石が一斉に止まる。こちらも止まるが、それで済まない。ごつごつと歪にしか見えない石が目に入る。少しだけ動いて、その石を真ん丸く見られても、別の石がまるで駄目で、どう細かく柔らかく動いて見ても、全てを真ん丸には見られない。ふらふらとも動けるが、何の当てもなければ、却って歪んでごつごつした石が増えるだけ。それで気付いたが、真ん丸に見えようが見えまいが、石は、音はしていない。実際の音は、石以外の諸々が囁くようにこそこそと立てて、木の枝に覆われる下に守られて混ざり合っていて、石だけは狂ったように黙っている。石を囲むものはどれもそれなりの音を鳴らし、それで石だけが目立って変で、狂って見えてしまうようだが、その狂ったように黙り込む姿が、逆にそれだけが音を立てていると見えてしまったらしい。或いは、黙り込む石の表面だけが、どんな音をも跳ね返して、石の周りに他を圧する大きな音を響かせているか。それならやはり音のする石ころなのだ、黙れば黙る程に。そしてもう、精々一つを真ん丸く見るのがやっとで、他の石は殆ど見失われている。その頼みの一つも、歪やごつごつを見なかった事にしているだけで

はないか。こうなるのは、引き返す用もなくなっては、もう避けようがなかった。そう分かってもいた筈だ。引き返すための用すらなくなっては、先へ進む用も見付かるまい。その用もなくて、先へ進むのが儘ならないのは当たり前で、もしそれでも先へ進めるなら、石は止まっていない。用などなくても先へ進めたなら、まだ石を転がしていられたに違いない。その力がなかったせいで、石を真ん丸に見るしかなかったが、実はごつごつした石ばかりでは、先は知れていた。ただそれでも辛うじて、目の前の一つの石を真ん丸く見ようとはしていられる。しかしそれが一体、何になるか。或いは、何になろうと、そうしている事が、差し当たってでもなく、行き着く所、唯一つの用だったのでは。そうであるなら、と割り切れば、真ん丸く見ようとするだけで、紛れもなく石は真ん丸で、他の石など無用で、遮っているとは分からなかった前を遮るものが、いきなり消えて、それなら確かな先が見えただろうか、しかし急に、殆ど真下へ落ちるように足を滑らせれば、やはり何の用も初めからなかったかのように、身はくるりと真ん丸に回って元に戻り、差し当たって用はなくても、足はまた木の枝を張った下へ向く。さてそれで、石ころを見付ける替わりに、そこに一個の石ころになって転がって、差し当たりどころか、石ころである限りずっと、何の用にも巡り会えそうにない。しかしそれで、石ころは転がり続け、当たっては砕いた全てを纏って巻き付けて、天の何処までも枝を伸ばす木を根刮ぎに

するまでに、大きく脹れていないか。そうならそれはもう、石ころではなく、果ての知れない木の枝の下に抱かれるほぼ全てで、ただその芯でなければならない始めの石ころ一つが見付からない、自らをそっと取り除いたかのように。そうして己の用を済ませた石ころ一つは、見かけ倒しの木の枝は、実は中は何処までも腐ってすっかり虚ろなのを、揺れる地面と風に暴いて見せ、ひっくり返れば、揺れる地面と風の虚ろを、青空より深い木の根に暴いても見せ、（二〇一二年十月二十七日）

（線を引く…）

線を引く、ただ思い通りに。それで、緩やかに脹らむ石の白い滑らかな表面を覆い尽くす。白を隈無く組み敷く。そのために爪に血を滲ませ石を掘っているが、石は確かに埋まっているか。砂ばかり溢れて足場も流れそうでは、爪の痛みばかり徹える。そこを掘る事になった経緯を思い出そうと、腕は止めず辺りを見回すと、上も下も草も生えない険しい崖で、前には、速い雲の流れる、砂で曇った黄ばんだ青空しかない。足元を砂が溢れるので踏み堪えられる。砂が掻き出されなければ、転げ落ちるしかない。砂煙の沈む遥か崖の下まで。少

し先に狭い岩棚がある。辿り着けたら砂に頼らずに済むが、石に線を引くのは諦めなければならない。しかし何時尽きるか知れない砂に、身を委ねてしまって良い筈もない。と言って、幾ら足を掻いても、砂を虚しく蹴るだけで先へ進めず、ここを抜けようもない。ただその砂だが、どう目を凝らしても、何処かへ零れ落ちて行くようではない。如何にも溢れるようなだけで、同じ砂を繰り返し掻き出しているのでは。掻き出したその両脇を渦を描いてまた元へ戻る。その間に、空中の砂も幾らか落ちる。それなら砂は無尽蔵も同じだが、石を掘り出せる見込みも、ほぼ失せたようなもの。僅かに陽が翳ったかも知れないだけで、岩棚も怪しい。例えば、岩の僅かな裂け目の影、或いは裂け目に沿って滲んだ濁り水の跡などが、そこを岩棚に見せたか。いやそんな裂け目などない。のっぺりと綺麗な岩肌が延び、目に見えるか見えないか、微かにそこを、しかし止めなく細かな欠片が剥がれ落ちるばかり。こっそりと、どれだけの時を費やしても、崖を跡形なく壊そうという揺るぎない決意が、そこにへばり付いているようで恐ろしく、目を背けたい。しかしただ見える通りを見るしかない、初めからそう仕組まれているかに。岩棚はもう何処を探しても跡形もない。そう見えた直ぐ先に分厚い岩棚は、反り返るように延び、青空を押し潰しそうな、遠く高い稜線だけはくっきりと刻む山並みが傾いて来て、岩棚の向こうの端とぴたりと繋がり、そのまま崖は丸ごと引き上げられてしまうかのよう。すると

岩棚は雲の懸かる山裾に巻き付くように縮んで姿を眩まし、そこは、山並みと崖の繋ぎ目だけになった。それを待っていたか、足元の砂が硬く籠もった耳障りな音で転びながら鳴って、一粒一粒が白い丸い石へと脹らんで、見飽きていた砂場がぐるぐると盛り上がり、崖と空と崖の底まで隠し、高い稜線だけが益益くっきりと直ぐ近くへ迫る。山なら、好物である石に食らい付きたいか。それでも砂はまだ石へ石へと膨らみ続け、山並みへと高く傾れ込めば、石の好物が山か、どちらがどちらを食うか食われるか知らないが、白くなだらかな一つの姿へと捩れながら溶けて行く。その山でも石でもあるようなないような姿を、その見える通りを、ただそのままに見るしかない。そしてそれはもう、ただそればかりであれば、何の形でもないような。で、線はどうなった。思い通りに引くための。見えないだけで、拡がる白を追って線は楽しく引かれているか。そうであっても、それを見えるようにするか、その手触りを確かにしなければ、線は引かれないも同じ。しかし線そのものより、それを引く楽しみが求められているのなら、何の形にもならない白を追って、その楽しみへ身を浸すのに何の妨げもない。と、その楽しみへと手を伸ばせば、先程、目を背けられなかった岩肌の恐ろしさが、何とも繋がらずにそっくり来る。手触りは線そのものだが、そのものなだけなら線ではない、そう思いたい。或いはそれが、そっくり線の手触りを伝えるなら、それが線であるのを拒めない。線に沿うように、とり

言うより、線のように、手触りは、否応なく延びて行くに違いない。その何度か見失われるようでも、それは、それを見失おうとしているだけで何も変わらない。思い通りに線を引く楽しみは、その延びて行くばかりの恐ろしさを紛らすための、一時凌ぎの方便でしかなかった。とは言え、それで線は終わり、どころか、線は終わっても、ただ線しか残らない。それしかなければ、思い通りも楽しいも楽しくないもない。それしかないなら、線でなくても構わないか。線でなければならない何かを見過ごしているだけかも知れないが。ただそのままでは済まない。出来れば話しを通したいが、線の話しは知らない。しかし線と線は、必ず話しをしているどころか、もっと直ぐに通じ合う遣り方を使い熟している。そうしてこそ線だけは残るに違いない。或いは、その遣り方こそが線であるのかも知れないなら、通じればそれが線で、線と線が通じない事などないなら、何もかもが通じ合って、それが、線の姿に見えている。ただそうであってもやはり、線と線の通じ合いでは通じない所に、寸分違わないままの岩肌の恐ろしさは、何とも繋がらないままで。他に何があるだろう、線は、ただその恐ろしさだけを、互いに通じ合わせているのでは。そうであるなら、そこを、一連なりの叫びでも貫かれていれば、何も線であるまでもない。しかしそんな叫びが何になる。どの耳に届く。恐らくそれは、叫びと何の係わりもなさそうな、例えば、石へと脹れる砂粒として、決してそれとは知れないように、

少しも途切れず衰えず、岩肌と競うように、延びて行くだろう。そうでなければ、恐ろしさへとは叫び続けられない。しかし恐ろしさとは。それへの叫びによってしか表されないなら、恐ろしさは、そのままそっくり叫びではないか。その叫びが線を引く。その思う通りに。その引かれて已まない線が楽しみでなくて何か。それは、何度殺しても甦る猛獣を、拳一つで、何度でも限りなく殺し続ける喜びのようだ。石へ石へと脹れる中には、その猛獣の限りない命が止め処なく孕まれ、それらが命となって山山の高みへ吐き出され、その果ての向こうが、転んで一息にこちらへ返れば、崖はもう跡形もないか、砂の一粒さえ何とも繋がらず、恐ろしさの痕を岩棚へ探そうにも、霞んで、陽に色めく薄雲の端へ傾ぐと見えて、（二〇一二年十一月二十三日）

（滝までで行き止まりと…）

滝までで行き止まりと聞かされても、中中見えて来ず、座り込んでしまったのが果たしてどうだったか、疲れているようなか細い声が途切れず周りで絡まり合い、一つの言葉だけが、酷く聞き取り難いまま繰り返されて耳障りなので、滝を探す遠くばかりを眺める振りで紛らすと、「見ろよ」「見ろよ」と粒立って

聞き取れる。それは、そちらの何かを見ろよ、の見ろよではなく、色を指す名前らしい。そう分かるのは、そこにその色が在るからだが、その色を見ろよ、と言っているのではない。何故ならその色は、少し震えてはいても、そこに動く兆しもなく、そこに在る全てを染めるように嫌でも見えてしまっていて、それを態態、見ろよと言うまでもないので。或いは「見ろよ」は色の名ではなく、必ずその色を纏って見分けられる何かの名で、その色とその色を纏う何かは、常に同じ名で呼ばれるようになって、そこに在るのかも知れない。しかしそうなら、それが一つの色の名かは怪しく、その色を含めた何色かの組みわせか、それで描かれる決まった模様なり図柄の名でもありそうで、そうして「見ろよ」と呼ばれるのは、それが嫌でも見えてしまう事が彼らにとっての危うさを呼び入れるので、互いに声を掛け合っていなければならないからではないか。そうであるなら、「見ろよ」を、暢気に聞き流してもいられない。そうして、見えもしない遠い滝から、もっと近くへ目を移すと、「見ろよ」はぴたりと已み、また聞き取り難い声ばかりが絡み合う。或いは已んだのではなく、その聞き取り難い中に紛れてしまったとも。さてそれで、幾ら近くに在るものを見直しても裏返しても、それらしい色も模様も図柄も、出て来ない。嫌でも見えてしまっているのは何だったか。尤もその何も出て来ない方へ傾く一歩が、滝へと立ち上がらせ、そちらへ歩いて行けるなら、それで構わない。「見ろよ」は、彼ら

に預けて置こう。しかしその次の一歩が儘ならない。「見ろよ」ばかりが溢れ返り、何の名か知れず、いや名でないかも知れずに分厚く弾んで立ち塞がり、押し返そうとすれば、息を止められるだけ。それでも押し続け、力を抜いて息を吸うしかなくなる刹那、耳の奥に滝の音が真っ直ぐ下を向いて、小さな石礫のように、コトリと落ちる。一度それを聞いてしまっては、息絶え絶えにも、どうにも徒労に過ぎないようでも、押すのを繰り返すしかない。そしてそのコトリは、落ちる度に、より深くへ、より静かに消えて行き、その何処かに積み上がって欲しいと願う程、裏切られる。その深く静かな中を覗いては、そこに滝の色でも探すしかないだろうかなどと狼狽える内に、そちらへと辿々しくも一歩一歩降りている。いや、降りているのは、その深さと静けさを測るための、コトリよりずっと小さな、消え入るような鈴の音で、その鈴を揺らすため、鈴に結わえた紐の端を力なく振っているだけではないか。その紐を振る力しか残っていない。しかしそれで十分どころか、深さと静けさに向かうには、却って大きく過ぎて持て余す程で、かと言って、それを弱めようもない。鈴の音も、恐らくは響いては拙い所にまで、岩でも砕くように響き渡っているだろう。それではもう鈴の音にも聞こえず、測ろうとされた深さも静けさも吹き飛ばされるしかない。そうしてその最も遠い所から、「見ろよ」の一声だけが、ひらひらとこちらへ舞い昇って来て、そのほんのりと滲む色の中に、深さと静けさを、

その底の底までを、掬い取っているのが見えないか。それを「見ろよ」と言われるなら、それを見るしかないではないか。で何が見えるか。見えるものなどなく、それでも見るしかないまま、その見えない中へ落ちて行くしかない。などと覚悟を決めれば、体は寧ろくるりと向き直るように浮き上がって、微かな鈴の音が、渦を巻いて静かに降り注ぐのを、耳ではなく、上を向いた目で聞き取るだけで、その目に鈴の音の細かな欠片が降り積もって目が塞がれると、その瞼の裏に滝が落ちているに違いないと思わずには、そこに留まれそうにない。そしてどうやらその滝は、水の流れ落ちる気配こそあるが、未だ少しも滝ではない。滝となるのに何が足らないか、それを学ぶための色と音を待っている。それを齎すのは勿論、そこまで辿り着いた目と耳だろうが、どちらも死んだように静かで使えそうにないなら、それは滝になれないまま流れて消えるしかないだろう。その消えるしかない方へ流れ落ちるのが、どうやら滝で、その色も音もなければ、ただその生まれたままの姿で。いや、見上げれば音は、その遥か高く掲げられ、その色は水の落ちる真下に深く沈んで微かな響きを水面へと匂わせ、そのどれもが、「見ろよ」と声を上げていないか。となれば、その音と色は、聞き取れないばかりの轟音と、溢れ返る目眩く極彩色のようでもある。しかし、ようでもあるだけでは、ただようでもあるだけで、そんなものは目にも触れず耳にも届かず、何処にもない。それでもそんな中を、と言うか、それら

を壊し壊し、その壊した中に身を潜めつつ、滝は、自らを身籠もったように落ちて行く。それなら生まれたままどころか、生まれてもいないままに流れるばかりの滝なのだ。いや、そうであるようなものでなければ、それは滝ではない。そのように見ろよ、と滝をそこにずっと守って動かない彼らは、ずっと声を上げていなければならない。その声を失えば、滝に呑まれたその身が、綺麗に忘れ去られると彼らは知っている。逆に、その声を守ろうと、滝は生まれていないままに留まろうとするようでもある。或いは、心底滝が壊し身をその中に潜めたいのは、その彼らの声だろうか。それを許さない声の続く限り、滝は、陽を受けて崖の縁へと虹を架ける事もない。そうして自らの色とも音とも巡り会えず、滝は、何時か訪れる筈の復讐の時を待つように時を待っている。そのような滝こそ、復讐の結果とも知らずに。或いは、「見ろよ」が滝に聞き取れているなら、滝は知っているだろう。しかしそれは、知らないのと何が違うのか。その違いを、甘く囁くように「見ろよ」と呼びたい声は掠れ、絡まり合うその途切れ目を滝は崩れて壊れて、（二〇一二年十二月二日）

（森を捨てると…）

森を捨てると決めなければ聞けなかった音に囲まれれば、自ずと軽くなる足取りの、深く積もった落ち葉を踏む音は乾いて跳ね、他のどんな音をも弾くようだが、何時の間にか何処へともなく滑って延びるばかり、振り返れば森は跡形もない。森で聞いたのは詫びや嘆きや悔やみの音ばかりで、必ず捩れ曲がった恨みが混ぜ込まれているせいで、その絶え絶えである程に決して絶えず、しかもそれらの音は至る所から滲んで已まず、計り知れない。その中に一際耳に付く音を聞き取ってしまえば、それから逃れようはなかった。森を捨てると決めたのは偏にそのせいだが、果たしてあれは音だったか。詫びとも嘆きとも悔やみとも違う、何の恨みも籠もっていない、森に満ちる空気の中の何ものにも向かわない、かと言って何処かへ突き抜けて行く気配もない、湿った木の根の熱にも裏返って崩れ去る一葉のようでも、その消え果てる一瞬が切り裂く光りの奥に、森を侮り蔑み、それで森を全て枯らす鋭い息が吐かれるに違いない、とだけは、はっきりと分かる。そうなってからでは遅い、と言うより、既に取り返しは付かない。それを覆い隠すための悠久の森だったか。そうなら森の営みは、初めから終わりまで見掛け倒しで虚しかった、と、そう断じるまでもなく、もう帰る道は森にはなさそうだが、別にそれに付き合う事はない。ただ他の何もそう思わなかったか、どうやらそれらは森とその結末を共にしたらしい。いや他の何もない。それらとは、そのまま森だった。となるとまさか、森を捨

てられたのは、その鋭い息だけで、その息を吐くものの足音だけが、森から遠ざかっていたか。確かめようもなければ確かめようもないままに放り出すしかないが、その放り出した所に数え切れない芽が吹いて、直にまたそこは森になるらしい。いや、陽は硬く乾いた風は已まず土はざらりとした切れ味、森など幻。しかしその幻へと、土埃に塗れた物の塊のような水が運ばれていて、ただそれはそのままでは水の用は為さない。用を為すとしたら、その積み上げられた上を平たくし、そこで足を休め息も休め、出来れば眠りも招き寄せたい、と取り留めもない望みを膨らます事位か。森は幻で、それで構わないが、全てが幻な訳はなく、幻でないものには、用を為さない水の塊の積み上がって行くのは邪魔であるよりない。水を運ぶのを已めさせたいが、幻でないものが水を運んでいて、水を運ぶものだけが恐らく幻でないようでは、幻でないものが幻でないものの邪魔の元で、ややこしい。そのまま幻でないものの好きにして置けないのは、悠久の森を一瞬で虚しくした鋭い息を、放ったままにもして置けないからだ。次の一息で、幻も幻でないものも、なくしてしまうだろう。そしてもうそれは吐かれているに違いなく、幻か幻でないか見当も付かない森が、積み上げられた水など粉々に砕いた上に伸し被さって、息もまたその何処かに深く埋められてしまえば、森ごと一連なりの巨大な化石のようで、それを隠そうとしないどころか見せ付けるよう、そこに命の息付く気配を探そうとする眼差

しをも石に変えたいのかも知れない。ただそれで森に係わる音から解き放たれたのではないか。愈愈、足も休め息も休め、暗い眠りに就けるのではないか。などとつい足元に目を落としたのが運の尽きか、そこはやはり、幻でも幻でないものでもない、森が石以外のあらゆる物に化けて定まらない、凡そ安らかな眠りを与えてくれそうな所ではない。勿論そこに音も溢れ、石でない物共は、その音を捻じ曲げ引き千切り捏ね回し、彼らの言葉で楽しい馬鹿話しに花を咲かせている。しかしその花が咲くだけ咲いて、延び切った話しに一瞬の翳りが差すのを見逃さず、鋭い息が、それら全てを刺し貫いて、黙り込むだけの石に変える。いや正確にはただ石と言うより、腐り掛けた木の根の股に挟まっていたのを手に取った、綺麗に平たい石ころの表面の、その石の形には不釣り合いに歪な擦り傷に、それら全ては変えられてしまった。だとしたら、その石の傷に吐き付けられる息の鋭く尖るのも、分からないではない。幻と幻でないものの境目は分からないままに。それなら試しに、石の傷に唇を押し付けよう、幻でも幻でなくても何かが起こる筈。すると歪な傷口は、思いの外、温かい。熱くさえある。しかしその熱には直ぐに慣れれば、唇の酷く冷たいのが身に堪え、押し付けた唇はもう怖くて離せない。離した唇がもし、もう感じ取れない程に冷たかったら、幻も幻でないものも区別なく、その冷たさに閉ざされて、傷の熱へ吐きたい息も、凍り付いて戻らないのではないか。まだ微かに熱を残すな

らその唇を歪めて石の傷口と溶け合わせ、そのまま二度と幻にも森の現れない崖の向こうまで走り切るしかないが、足は。傷の熱を喉の奥へ流し込んでも何も返って来ないなら、足はもう凍った石と諦める。ただ唇で石の傷を蕩かして、その擦り合わされる歪さに物を言わせ、詫びや嘆きや悔やみの音を漏らし続けるしかない。森を捨てると決めた所からすれば真逆の成り行きに違いなくても仕様がない。唇ごと、石も傷も歪さも捨ててしまう手はあるか。それで化石の森だけが残るなら、崖の向こうへ届いたようなもの。しかしそうしようにもそれは、何が幻で何が幻でないかを忘れる事でもあって、唇も石も、幻でも幻でないものでもないままでは、出来る事ではない。そうして漏れ続ける音の澱みに、変わらぬ恨みがそっと渦を巻き始めるなら、そこに逆さに映る森は、石を脱ぎ捨て、そこに甦る生き物達の息を揺らめかせるようでもあるが、欺かれてはならない。いやどうして欺かれよう。寧ろ余りにそれは欺こうとする様をこれ見よがしに晒していて、却って、欺かれまいとする方が欺かれているのかも知れないような。その妙な何処かに、幻でないないものへの道が隠されてもいるかのよう。しかしそれにこそ欺かれてはならないと吐く息に、唇は飛ぶ水のように破れ、その波打つ膜に立つ薄い音は、（二〇一二年十二月十一日）

（草陰の、その線に…）

　草陰の、その線に触れても、触れていると感じない。盗んだ線だから。線しか盗めなかった。引き剥がそうとしなくても、するりと線だけなら手に取れたので。後はただ体の向きを変えれば草陰で、草の根元の青い土は、草の毒に痺れて動けないまま何処かへ透けて行くようで、しかしそれで線は昂ぶったように浮き立って消えそうにない。赤黒い角張った細い筋が延びて行くようでさえあるなら、触れていると感じられないのは、触れていないからでは。改めて手を置くと、そこで線は縦と横の二本になっていて、どちらが縦で横か分からない。交わってはいるのだろうが、十字が見付からない。そうなるまでを見ていた筈の草に尋ねたいが、すっかり別の草と入れ替わっているような余所余所しさに気圧されて、線からさえ目を逸らすと、そこは酷く隔たっている線と線の間で、その果ての知れないような拡がりを見渡せば、二本の決して交わりようのないのが知れる。その替わり、薄く細くぼやけて消え入りそうだが、その二本の線の影の交わる十字は、直ぐそこに見付かって、それを撫でると、確かに触れていると感じられ、そのままずっと撫でていると、それは影ではなく線で、遠く離れて交わらない縦と横の線の方が影にも思えて来るが、やはり決してそうでないと思い直させられるのは、縦横二本の線は延びて行く先の果ての知れ

ないのに、交わる十字は、その周りをふわりとぼやけさせ、ずんぐりと縮んで行くようだから。そうなるともうそれは、影でもなさそうで、厚ぼったい十字でだけが、遠い線とは係わりなしとばかりに転がり始める。しかしどうもそれは見せ掛けで、その転がる振りで、遠い二本の線を操っているようでもある。そうではないのか、と十字に尋ねると、十字は、向きを変えないまま、こちらを向いた。その姿に見覚えがある。見れば見る程、それは見覚えのある内の特に見覚えのある、いや見覚えのある唯一つのものでしかあり得ず、であるならそれは自らの姿であると観念するしかなさそうだ、実は全くそうではないのではと疑うままにも。それで十字は二つになった。こちらを向く十字と、それを自らの姿と見たもの、つまりは十字。それは早速嬉しそうに何度か入れ替わっていて、瓜二つのどちらがどちらか分からない。しかしやはり必ずどちらかが先にあって、もう片方は後からそっくり真似て作られたに違いない。決して双子ではない。或いは先か後かでなく、一緒に出来上がったにしろ、端から全く出来は違うに違いない。それとも、そうとでも考えなければ二つが一つになってしまいそうで、そう考えてしまうだけか。そしてそう考えるのは、幾ら区別の付かない自らの姿でも、その内の十字を見出した方だけで、見出された方の十字が何を考えるかは、まるで分からない。そんなまま、どちらがどちらか分からず絡まり合うのは、何とも危うい。と考えるのも片方だけでは中中次の手は

打ち難いが、手を拱いている訳にも行かず、と言って下手をしては、もっと危うい。いやどの途打つ手がないなら何をしても同じで、いっそ思い切り下手を打って、どちらかを消してでも、危うさを一切吐き出してしまうのはどうか。そしてもう下手は打たれたのか、片方の十字は、どちらが縦か横かは知れないが、縦の線へ、もう片方は横の線へと、分かれて行く。そしてそのどちらがどちらか分からなければ、どちらも何も考えていないようで、となると、二つが絡んでいた、今は何もない辺りが、これを考えているらしい。しかしそう見えるだけで、どちらかがどちらかを出し抜いた。一つの十字は、ぴたりと元へ戻って、くるくる回り、遠く隔たる縦と横の線を好きに操っている。しかしそう見えるだけで、もう一つの十字も、それにぴたりと張り付いて、ほんの少しだけずれながらも、くるくる回っている。或いは、そうして重なって擦れ合うので、二つはくるくる回れるのかも知れないが、そのどちらも、もう片方を出し抜いている積もりではないか。しかしそう見えてしまうなら、その二つの十字が、そう見えるように出し抜いているのだ。で、出し抜かれているのは何か、と問うものが、出し抜かれている訳で、その目には、擦れ合う十字が、遠い縦と横の線の隔たりより、更に余所余所しく隔たっていると見え、二本の線よりずっと近寄り難い。触れようにも触れられないだろうし、決して触れようともすべきでない。そうしている間に縦と横の二本の線は近付いて来ていて、どち

らが縦で横か分からないまま一本の線に収まると、その両脇に二つの十字は向き合い、片方が草の毒の息を吐いて、もう片方を殺した。しかしどうやら、殺した方が殺され、殺された方が殺すべきだった。そうでないばかりに、殺した方も殺した事で、自らを殺す事になってしまい、そうして二つの十字が草の根元の青い土の奥へ消え、一本残った短い線に触れると、触れていると感じない。盗んだ線だからかは分からない。或いは、盗まれた線だからではないか。盗まれてしまったものなら、そのまだ盗まれたままでは、それが目の前に置かれても、触れられない事もありそうだ。それが盗まれてさえいなければ、その姿には見覚えがあり、見れば見る程、それは見覚えのある内の特に見覚えのある、いや見覚えのある唯一つのものでしかあり得ず、であるならそれを、自らの姿であると見られたかも知れない。しかしその線を盗めるのは、どう考えても、その線を見詰めているものしかなく、そうであるなら、盗んではならなかったかも知れない自らの姿を、自ら盗んでしまった事になる。しかしもし盗まずにいたら、その線もそれを見詰めるものもなかったのではないか。いや、それがないなら、その替わりの何かがあり得た訳で、恐らくはその何かが、線を縦と横とに遠く隔て、その間の空っぽな拡がりを求めたのではないか。しかしその拡がりももう取り返しようがなければ、一本の線を全ての始まりのように見せ掛けて、その線の淡くぶれる影を裂いてばらして組み合わせて、（二〇一二年

十二月十二日）

（色を吐かなければ…）

　色を吐かなければならなかった。五色か七色。それで多分、息を吐いた。それが五つか七つの丸い塊に散らばり、吐いたのはどうやら息でなく食べ物。しかし綺麗に色分けされ、それぞれに違う高さに、宙に浮いているなら、それらは食べ物とは似ても似つかない。と言って、色を吐いたのでもないのは明らか。まだ色を吐かなければならないのに変わりはないので。いや或いは、色は吐かれ、その吐かれた色の行方知れずなだけ。五つか七つの浮いた色の塊がそこを塞ぐので、色を吐くしかなく、吐いても吐いても何も変わらないので、吐き続ける。しかしそうと分かればもう、色を吐かなくて良いのでは。色を吐いたところで仕方ないのだから。で、色を吐くのを已めたいが、果たして已められたかどうか。確かめようもないなら已められた事にして、それで何もなければ、もう何もしなくて済む。しかし途端に、その五つか七つが怪しくなる。慌ててまた色を吐こうにも、どうすれば色を吐けるか分からないまま、吐けているか確かめようもなく、怪しくなる五つか七つに目を凝らすしかないが、その何が

怪しいのか、その色なのか丸い形なのか、その数なのか、それがそこに在る事からして怪しいか、どれでもあるような、ないような。抑もその五つか七つに、とても目を凝らせているようでもない。それなら、その五つか七つが、互いを怪しみ目を凝らし、少しでも隙があれば付け込んで、隣の奴を消そうと狙っているようで、そしてそれは実際に次々に消され、そこをまた別の色の塊が、静かに湧き出ているに違いない。だから五つか七つのまま何時までも、どちらとも定まらない。何故そんな事をするのだろうと問うと、その問いが逆に問われてしまう。何故そう問うのか、と問われた方は、ただ逃げるしかないが直ぐに、その五つか七つの中に囚われ、五色か七色かの光りを雁字搦めに受けて、全てを晒すしかない。ただそうであっても、僅かな光りの斑が薄い影を落とす一箇所があって、そこも光りに晒されてはいるだろうが、じっと待てば一瞬の隙を、ものに出来そうでもある。そうしてそこに目を凝らしていると、何と多くの色が入れ替わり立ち替わりそこで転げ回るのだろう、と、いきなり目を瞠らされ、そこへずっと色を吐き続けていたのだと気付かされる。その色の出入りによって、問うているか、答えているか、そのどちらでもあるようなら、その問いも答えも、五色か七色の前に何の役にも立ちそうにない。問いと答えが溶け合って、数え切れない色の絢い交ぜられた綾を追うのがやっとで。ただそうしてその綾を引き寄せておけるなら、そのままに、五色か七色かの縛めを抜けられて

いるようではないか。そのためには吐く色を途切れさせてはならない。と思うと、それは途切れたようでもあり、色の綾は見る見る縮んで五色か七色かの渦の中へ回って砕ける。それでもまた色を吐いてしまうなら、それは何処へ行くでもなく、五色か七色かの周りに満ちて、その五つか七つの塊を潰すか沈めるかの勢いで、収まりそうにない。五つか七つがすっかり消えて良い筈はなく、色は吐かれるしかないなら、その吐かれる色をどのようにか変えて、勢いを削ぐなりするしかないか。そう思うまでもなく、その色のまま、それと分からないようこっそりと、色はどれもすっかり中味を変えていて、それで五色か七色かは、溺れそうになった色の海から救われ、迎えに現れた雲にでも乗るように空高くへ散らばって行くが、乗り遅れた一色だけは暗い辺りに落ちて身を隠す。身を隠せるのは暗いからでなく、その一色が、自らが何色か見て取られないよう、次々に色々な色を吐き続けるからで、それが辺りをまた少しずつ暗くして行く。その暗さは、そこに数え切れない色が含まれなければ滲み出ない、薄っすらとした色のない輝きを漂わせ、そこにずっとそうであるなら、それが答えのようでもある。では答えの問いは何。答えである色のない輝きは、自らの問いを探しに、その暗い辺りを突き抜けるが、それで答えである自らを擲ってしまって、それでは問いを探しようもない。しかしそうならそれはまた何かの問いだが、ただ答えを無くしただけの問いなど何処にでも転がっている。それで

もそれはまだ、漂う色のない輝きで、そうであるためには、その周りを、数え切れない様々な色が、その輝きを消して、彩なしていなければならない。それでやっと、色を吐かなくて済む。そればかりか、選り取り見取り色を啜って味わえる。いや、啜ると吐くで何が違う。実は吐きながら啜ってもいたし、啜っても、それは吐いてもいる。ただその同時に吐いて啜る色が同じ色かどうか、せめて補色か、それも分からなければ、果たして吐いて啜っているのが色かどうかも怪しい。偶々色が映る何かを、吐いて啜っているのでは。そうしてその何かの感触が舌にぬるりと一塊に来ると、その上っ面に刺さって尖る或る一色だけの味が、漂う色のない輝きの真ん中に、鬼のような姿になって感じ取れる。それは殺さなければならない。そうであるために鬼のような姿。いやそれなら鬼のようでなくしてしまえば。それにはそこに別の色の味を混ぜれば良さそうだが、幾らぬるりの一塊を舌で転がしても、他の何の色も味もない。そうしている間に、それは鬼のようどころか一匹の鬼になって転げ出て、暗い方へ落ちて行く。目を凝らすと、鬼の口か肛門のどちらかから、尖った色が途切れず吐かれ、それがゆっくり渦を巻き始めるだけで、渦を壊そうと、五色か七色かが、漂う色のない輝きに取って代わって、暗い方を照らす。それで尖った色は途切れるが、途切れながらも渦を巻き、それでも吐かれ続け、その色の切れ切れは次第に隔たっても、繋がりは見失われない。しかし何の繋がり。尖った色はど

れももう磨り減ったかして消え、その目に見えない繋がりだけの渦が、五色か
七色かから、息絶え絶えでもあるかのように逃げよう逃げようと、（二〇一二
年十二月二十八日）

断片　二〇一二

著者　u_

© 2012 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published